
魔法少女リリカルなのは～フェイトと英雄～

いおりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜フェイトと英雄〜

【Nコード】

N4798L

【作者名】

いおりん

【あらすじ】

すいません、魔法少女リリカルなのは〜フェイトと英雄〜を書いていたレノバティオです。訳あっていまは、いおりんですがまたよろしく願います（T^T）

主人公設定

名前

アルベルヒ＝シャルトル

身長

174?

体重

68キロ

血液型

A型

管理局の貿易で盛んな世界、セントヘルナの英雄。その力はまさに一騎当千。階級差別が激しいセントヘルナで誰かを助けたいと思う思いで、自分の思った通りの行動をしてきたら英雄とまで呼ばれるようになった。魔法量はほぼ一般人よりちよつと上ぐらい。しかし、気にせず剣術だけはひたすら毎日繰り返した。そのおかげで剣術だけは魔法抜きで白兵戦だと正に英雄と言葉がふさわしい。ある時、デバイスがないと流石に厳しいと思ひ探した所レノンに遭遇しマスターなる。一時期、悪政をしていた王族を仲間と協力し追い詰め民主主義を提案。もはや、セントヘルナの歴史になった出来事である。そのことが、管理局に伝わってスカウトされたが拒否した。理由は子供から目を離したくないからである。性格は、基本的には

人見知り。しかし、子供好きで優しい性格の持ち主である。

デバイス

レノバティオ

通称 レノン

セントヘルナの最高のデバイスマスターによって造られた作品。マスターによって様々な形になり、持ち主が本来持ちえる才能や能力を最大限に引き出す。誰かのためになるように、誰でも英雄になれるという思いで造られた。マスターになるためにはレノン自体が認められないとなれない。

1話

はあ、はあ、はあ

こいつはさすがに...

ハアアア、ヤッ、ソリヤ

ハアハア...後何人だ？

《ざっと二千は越えてるな》

イケると思うか？？

《……さあね、神様に
アルベルヒ？？》

でも頼むか？？なあ、

神様ね……なあ、レノ
んだことはあったか？

ン俺は今まで神様に頼

《……さあね》

……全く、終わったら
スクラップにしてやる

《ハハ！！そいつは傑作
アルベルヒ！！》

だ、楽しみにしてるよ

ああ、楽しみにしてる

とある国のとある英雄が今戦場に立って約二千対一人で戦っていた、
回りは敵ばかり、アルベルヒは英雄と言われるほど強く、みなから
も慕われていたが今回はさすがに誰からみても無理に近かった……

ハアアアヤツ！！ハア！ レノン、弓だ！！

《了解したぜ、ほら》

我、アルベルヒの名に

おいて力を開放したま

え……ハアアア！

《アルテミスブレイカー》

……どうだ??かなり

減ったな……

《まあ、百ぐらいだな》

そうか…おいあの光は

なんだ??

《ん〜?……ヤバイ》

なんだ?何がヤバイ?

《アルベルヒー!!逃げる

ぞ!!あの光はヤバイ

》

チッ…逃げるってどーに！？

《とにかく遠くだー！
ほら来るぜ》

まずい、レノン！…！
シールドだー！

《アイアスシールド》

ぐうう、なんて魔力だ

《アルベルヒー！シールド
ドがもたねえ！…！》

くそ、あ……………うわあ
あああー！

謎の光によってアルベルヒは包まれた、この出来事はアルベルヒとある人たちとの出会いの始まりだった…

フェイトside

ふゝ終わった、これで最後だよね??バルデ イツシュ??

《先ほどの書類で最後で す》

そう、じゃ今日はもう帰 ろっか。

《イエッサー》

管理局の“金色の閃光”ことフェイト・ハラウンは自分の仕事を終えて帰宅しようとしていた。今、彼女の頭には疲れと心配が渦巻いている。

はあ、ねえバルディッシュ???

《なんですか??》

はやての新しい部隊、成功すると思う???

《……おそらく大丈夫でしょう、だから元気を出してください
い》

そうだね、うん。はやてなら大丈夫だね、それになのはやクロ
ノも協力してくれるし……あれ??何??あの光??

《サー、気をつけて下さい、強い魔力を感じます》

うん。分かってる。バルディッシュ、あの光が何か分かる???

《恐らく、ロストロギア関係だと。セットアップしますか??》

うん。お願い。

《セットアップ》

よし…あの光が何なのか調べるよ、バルディツシユ。

《イエツサー》

彼女の仕事部屋に突如現れた光、彼女はまだこれから自分の人生に大きく関わる人に出会うことを知る術もなかった

あれ??光、なくなっちゃったよ??大丈夫かな??

《サー、大丈夫です。それよりもあそこに人が倒れてます、どうしますか?》

本当だ、それに凄い傷…バルディッシュ、病院に連絡を。出来るだけ、早くお願い。

《イエッサー》

フエイトsideEnd

俺はどうなった？？

死んだか？？

それは、いやだな。まだ女もできてないし、それにあいつらが待ってる。

《……きる。……起きろ！！アルベルヒ！！》

はあ、まったく幻聴まで聞こえてくるぜ。こりゃ死んだな。

《いい加減起きろ！！》

うわぁ！？…レノン？俺もしかて死んでない？

《当たり前だ、死んでネエーよ。あそこに寝てる金髪のねーちゃんに感謝しろよ、あのねーちゃんが助けてくれたみたいだからよ》

そうだな……

これが二人の最初の出会いであった。

2話

「アルベルヒさんですね。あの、いきなりこんなこと言うのも突然ですがあなたは保護という形でこの病院にいます。いくつか質問しても??」

「ああ、構わない。」

「あなたは私の仕事部屋で倒れいたんですが、何が起きて私の仕事部屋に??」

「……………それは、わからない」

「分からない??」

「ああ、どうも記憶が曖昧でな。すまない。」

「……………分かりました。それでは、光については覚えていますか？」

「光とは??？」

「私があるあなたを見つけた時、光から傷だらけのあなたは出てきました。その光は私の推測ではロストロギアに関係して……」

「話に割り込んですまないが、ロストロギアとは??？」

「ロストロギアは……………です。」

「なるほどな。そのロストロギアっていうもので俺は元いた所から飛ばされたのか。」

「おそらく、アルベルヒさんは元の世界の記憶は大丈夫ですか??」

「なんか、病人あつかいだなこれは。……すまない、話がそれた。元いた世界と自分の母国しか思い出せないんだ…元いた世界は通称セントヘルナ。俺の母国は………」

「あの、どうしたんですか??」

「あ、いや。どうも曖昧でな、済まないが今は答えられない」

「そうですね、セントヘルナって言う世界は確か管理局と貿易で有名ですから、私も知っています」

「何???今、管理局と言ったか??」

「あ、はい。それが何か??」

「君は管理局の人間か??」

「はい、そうです」

「そうか……………」。

「管理局をご存知で??」

「まあ知ってるといえば知っているような気がするがな。ところでここに管理局があるのか??」

「はい、ここはミッドチルダと言われる所です」

「なるほど…他に質問は??」

「えと、身長と体重を教えてください。」

「身長は176、体重は65だったと思う。」

「ありがとうございます……。」

「何か言いたそうな顔だな。」

「あの、私ってそんなに信用できませんか??」

3話

「ふむ、信用できないとは??」

「アルベルヒさん、あなたは私に嘘をついていますね??」

「……………理由は??」

「なんとなく、分かるんです。アルベルヒさん、貴方の顔を見ると。」

「ふっハハハ、ハハハ！そうか、そうか。」

「む、なんで笑ってるんですか!??」

「あゝ、久しぶりに笑ったな。いやいや、失礼した。君があまりに……ふっハハハハハハ!!」

「アルベルヒさん、私怒りますよ??」

「これはまた失礼した。そんなに怒らないでくれ。そうだな、君の予想はだいたいあっているよ。」

「なぜ嘘を??」

「君は初対面の人を信用するか??それに俺は異世界から来た者だ、右も左も分からない迷子。そんな俺にとって必要なのは情報と信用出来る人、君が信用出来るかどうか分からなかったのだから、だから嘘をついた。」

「そうですか……。」

「済まない、命の恩人にするべき態度ではなかったな。」

「それで、私は信用できますか??アルベルヒさん??」

「ああ、君みたいな良い目をしている人はだいたい信用できる。嘘をついて悪かったな。」

「いえ、じゃあ本当のことを話してくれますか??」

「そうだな、話してもいいが他言無用だ。報告書には記憶が曖昧と書いてくれると助かる。」

「分かりました。」

「まず、俺の名前はアルベルヒ＝シャルトル。そして君も持っていると思うが一応相棒のデバイス、レノンだ。」

《やっと、話せるぜ!!--いや〜うれしいね、相棒だってよ相棒!!--オ

レサマはこれぽっちも思っていないのにな！！ダハハハハハハハ！！
つーわけで、よろしくなフェイトちゃん！！」

「……………よくしゃべるデバイスですね。」

「ああ、一応これでも貰い物だから壊しはしないが一言で言えば大
変だ。」

「苦労してるんですね。」

「まあな。」

《おい、おまえらオレサマの前で悪口を言つな！！人の悪口を言っ
なつてママに教わらなかつたか！？》

「まあ、よくしゃべるデバイスだが性能は確かだ。」

「…………成る程。」

《おい、おまえらオレサマを無視するな！！》

「それじゃ、次だが…」

「あの??」

「なんだ??」

「今、かなり夜おそいので明日に話しくれませんか??」

「確かにな、済まない。気づかなかつた。じゃ明日に。」

「ありがとうございます。じゃ、また。」

「ああ、また。」

《……………》

「ん？どうしたレノン？？」

《なあ、アルベルヒ〜、オレサマさあ、何か悪いことしたかあ？
？マシで泣きそうなんだけど》

「……………頑張ってくれ。」

《ダア〜、もう我慢できねえ！！もういいもんね！！ここら一帯
を吹き飛ばして、オレサマを怒らすとどうなるか教えてやる！！》

「やるのはいいが俺は協力しないからな。」

《まじかよ！！それじゃ吹き飛ばせないじゃん！！》

「……………レノン、お前馬鹿だな。」

《今更そんなことをいうな~~~~~！！》

フェイトとアルベルヒ。これから二人がどうなるか分からないが、フェイトもアルベルヒも少しはお互い理解したようだ。今、言えることはアルベルヒの夜はまだまだ長くなるということだけだった

4話

次の朝

《いや、良い朝だね。最高だね、そう思わないか??アルベルヒ??》

「……………」

《アルベルヒ、聞いてるのか??》

「……………だまれ。」

《なんだよ、アルベルヒ。冷たい奴、そんなんじあフェイトちゃんに嫌われるぜ??》

「……………しゃべるな。俺はいま眠くて、機嫌が悪い。うっかり、

手が滑ってお前をスクラップにしかねない。」

《どんな、うっかりだよ！！明らか故意じゃねえか！！》

「……………あ、手が滑りそうだ。」

《わかった、分かったよ。オレサマ大人しくするから、その大きく振りかぶった手をおろして下さい》

「分かればいい、じゃあおやすみな」

《この暴君め！！早く寝ろ》

数分後

トントントントント

《ん？アルベルヒ？？客が来たみたいだぜ》

「…そうみたいだな。どうぞ、入ってくれ。」

「おはようございます、アルベルヒさん。」

「ああ君か、おはよう。」

「あの、まだ朝食を取ってないと思って持って来ました。今、起きたんですか？？」

「ん？？まあ、そんなところだ。朝食ありがとう、おいしく頂くよ。」

「はい、それでアルベルヒさん。食べながらも良いですから、聞いて欲しいことがあるんです。」

「ふむ、朝一番で来るからよっぽどのことなんだろうな。話してくれ。」

「はい、私アルベルヒさんには悪いんですが昨日アルベルヒさんについてちょっと調べていたんですが……………」。

「どうだった??? つまらない男だろう??」

「正直いうと驚いてます、まさか貴方が孤高の英雄だなんて……………」。

「みなそう俺を言うが、俺はただ自分の正義を貫いているだけだ。何の変わりのない一介の兵士と一緒だ。」

「違います!!」

「……………どうしたんだ?? 急に??」

「あ、えと、その…：すいません。急に大きな声だして。」

「別に構わないが、何が違う??？」

「えっと…：私アルベルヒさんのこと調べた時、ちょっと感動したんです。」

「感動した??？」

「はい、アルベルヒさん。私は貴方の行為にとっても感動しました。」

「べつに感動も何もそんな大層なことにはしてないとおもっが。」

「いいえ、アルベルヒさんの行為は凄いです。」

「じあ聞くが、どんな行為が凄いのだ??」

「え…そうですね、まず奴隷解放、次にめぐまれない子供を集めて作った家、他には…」

「もういい、分かったから。どれも、自分の正義に従っただけだ。」

「だから、凄いです。ほとんどの人は、アルベルヒさんの言う自分の正義を貫こうとは思いません。私はアルベルヒさん、貴方みたいになりたいとも思っただんですよ??だから、自分を否定するような考えを持たないで下さい。」

「……………考えとくよ、フエイト。後、敬語はやめてくれないか??
どうも、苦手だな。」

「はい…じあなかった、えと、うん。私もこれからアルベルヒっ呼んでいいかな??」

「ああ、構わない。」

朝の会話をして、アルベルトの心は段々フェイトに向けられていった。またフェイト自身ききしていないがアルベルトに惹かれているようだ。

5話

「じゃあ、私行くね。」

「ああ、食事運んでくれてありがとう。」

「うん、また来るから。」

《……行っちゃった、フェイトちゃんやっぱりいい子だね〜。そうは思わないか？アルベルヒ？》

「そうだな、俺のしてきたことはフェイトは良いことだと言ってくれた。まだ会って日が浅いのに……。」

その日を境にだんだん俺とフェイトはよく話しをするようになっていった。くだらない話や好きな物、俺の故郷の話そのほかにも沢山話した。

何日か経ってから彼女が子供を引き取ることについて相談してきた。

さすがに驚きはしたが、フェイトがあまりに真剣な顔で相談をするので俺は自分の経験を元にアドバイスをした。その時のフェイトの顔はまるで俺を神のように拝んでいた、その子供は男の子と女の子二人いるらしい。名前は確かエリオとキアロだったかな??まあ、毎日のように俺の病室に来て相談しに来るから名前はいつの間にか覚えてしまったよ。フェイトに今度会ってやってくれと頼まれたので俺が約束しようと言ったらフェイトは泣いてありがとうって言うてきた、俺はその後なんとかフェイトをあやしたがレノンの奴がいるいる騒ぐからいろいろ大変だった。その次の日俺は絶望することをしらずに……。

ー次の日ー

「アルベルヒ???いる???頼まれた本持ってきたよ。」

「ありがとう。フェイト。そこにおいてくれ。」

「うん。あ、アルベルヒ???また読んだ本そのままにして、ダメだよ???片付けなきゃ???」

「すまない。どうも読んでしまつと周りが見えなくなってな……。」

「もう、これからは気をつけようね?」

「分かったよ、フェイト。」

「うん。あ、アルベルヒ?ちょっとテレビつけていいかな?」

「ああ、構わない。」

「ありがとう。」

『ピピ』

『先日から、新しくオープンしたレストランのことですが……』

「何を見るんだ??」

「それは…秘密だよ。」

「秘密??フエイト、前に俺たちは秘密やうそはダメだっていったのは君だろ??破る気か??」

「もう、すぐ本気にするんだから。占いを見るんだよ??」

「そうか、占いか…占い??それは何だ??」

「占いって言うのは……。」

『番組の途中ですが、臨時ニュースが入ったのでお伝えします。え??これって……すいません。管理局と貿易で有名なセントヘルナが先程なんらかの原因によって消滅し……ました。そんな!?被害者は約二千億を超え、ロストログアかと管理局は……。』

「な……………」。

「え！？……………」。

これからアルベルヒの苦悩が始まる、フェイトもまたアルベルヒと
いっしょに苦悩する。フェイトはアルベルヒを支えることはできる
だろうか……………」。

6話

「……………」

「……………」

「はは、何を言っているんだ??この女は…セントヘルナが消えるはずないじゃないか…そうだろ??フェイト??」

「あの、アルベルヒ??これは…、多分…。」

「言つな、フェイト。頼むから言わないでくれ…信じたくないんだ。」

やけに、辺りの温度が冷たくのし掛かってきた。いきなり、戻る場所が消えたなんて思いたくなかった。多分、オレはセントヘルナの子供たちや大事な友人たちの為だけに戦ってきたと思う。それはオレの中にある唯一の正義であって、信念だった。その守る人がいなくなったらどうなるだろう??考えたくなかった…

「……一人にしてくれないか??」

「……わかった、またくるからね。だから、こんなことを言うのは変だけど元気だして。」

「……ああ。」

それから、オレはまるで人形みたいになった。

何を聞かれても、耳に入らないし頭にあるのはセントヘルナのことだけだった。なんで消えたのかそれは本当なのかそーゆーことはどうでも良かった……。受け入れるのは難しくはなかった。もともとオレは孤高の英雄と言われてる男だから、人が死ぬことは痛いほど分かっていたし、殺してきた。だけど、今回は……

《今回はさすがにアルベルヒでも、耐えられないか……まあ仕方ないけどな。オレサマでも……。けどよ、もう聞いてから結構たつよな??もう、コレは事実なんだよ。お前がいままで助けた人、感謝した人、友人、全員しんだ……。それ以上もそれ以下もねえ。》

「……………」

《だんまりかよ、なあアルベルヒ??いつまで、腐ってる気だよ。頼むから、いつも通りオレサマを叱れよ。こんなになるお前なんて初めてみるけど、見てらんねえよ。》

コン、コン、

「アルベルヒ??お花取り替えにきたよ。」

《なあ、フェイトちゃん。アルベルヒを、頼むから元気ださせてやってくんないか??》

「うん、分かってるけど…」

《ああ、コイツはもうなにを聞いても返事はしないだろうな…。コイツはな、フェイトちゃんも知ってると思うけどただ助けたいだけだった。理不尽な理由で殺される子供が許せなくて、まるで人を雑巾のように使う金持ちに怒りを感じた。ただ人を助けたい思いでコイツは強くなつたし、そのためならどんなことだってやる男だ。自分がどんなに罵られても、耐えたし怨みもたくさん向けられた。ま

あ、民衆はアルベルヒを英雄だと言っがな…今はそれがなくなつたんだ。生きる理由がなくなつたとも言える。だから、生きる理由をコイツにあげてくれ。それさえしてくれたら、また復活するからオレサマはもうアルベルヒをみてらんねえ。たかだか十年ぐらいコイツとやってるけど、コイツのこんな姿ヤなんだ。》

「…うん、やってみるよ。レノン。」

フエイトはただアルベルヒに元気になつて欲しかった。アルベルヒははただじつと下を向いている。その先にあるのはセントヘルナだと分かっていた彼女は、まずは目を覚まさせることから始めた。

「ねえ、アルベルヒ???私と一緒に散歩でもしない??」

7話

「ほら、今日はいい天気だよ。」

「……………」

「ねえ、アルベルヒ?? 私との約束覚えてる?? エリオとキャロのことだよ。」

「……………」

「ねえ、アルベルヒ?? 私ね、ある友人に助けられたんだ。昔のことだけどね。でも、私の友人は何度も私に話しかけて助けてくれたんだ、だから私も何度でもアルベルヒに話しかけるよ。だって友達だもん。アルベルヒが今どんな気持ちか、想像もできないけど私はあなたが話してくれるまでずっと待つよ。アルベルヒ。」

フェイトはそう言いながら手を握ってきた。彼女の手はやけに暖かく感じた。まるで、母親のような手だった。今は顔も思い出せないけど……

「……………フェイト。」

「なに??アルベルヒ??」

「なんでだ??キミはなんでそんなにもやさしくしてくれる??何日も…今、オレは…………。」

「大丈夫だよ、さっきも言ったけど友だちだもん。私はあなたを助けたいの。」

「……………友だちか。懐かしいな。なあ、フェイト??オレはどうしたらいいと思う??もう、オレの…………。分かっては、いるんだ。オレの住んでいた世界も人もなくなっていることは。オレ一人ここで生きていることに対しては、僥倖だとは思っている。実に幸運だ。だが、生きる目的がなくなったオレはもう…………。」

「アルベルヒ、私から言えるのはひとつだけ。それは、また見つければいいよおもうよ。だって、まだアルベルヒは生きてるんだもん。まだ、時間はあるんだから、ねえ??だから、忘れるなんて言わないしこれからずっとアルベルヒを苦しめるかもしれないけど、セントヘルナはアルベルヒあなたの心にあるはずだから。だから、今を見失わないで欲しいな。」

「まったく、キミにはかなわない…。心にあるか…確かにそうだな。フェイト、礼を言う。キミの言葉で目が覚めたよ。そうだな、また探せばいいんだ。」

いままで、狭かった世界が急に広く感じた。確かに、過去に執着して今を生きないのはダメだな。フェイトの言うとおりだ。オレはこれから……

8話

あの日、フェイトに諭された日からオレはいままでのことが嘘のように順調に回復していった。

大分、動けるようになってからオレは私の仕事を手伝つてとフェイトに頼まれたので引き受けるした。あと、フェイトの約束通りエリオとキャラコと言う子供に会ってきた。二人とも、とても出来た子供だった。今は別の世界にいるけど、その前はよく遊んだりエリオに稽古をつけてやったりした。あの子は強くなるなと感心したものだ。それから…………

機動六課

「機動六課課長、そして総部隊長の八神はやてです。平和と法の守護者、时空管理局の部隊として事件に立ち向かい人々を守っていくのが私たちの使命であり、なすべきことです。実績として実力あふれた指揮官陣、若く可能性にあふれたフォアード陣、それぞれ専門技術の持ち主のメカニクやバックヤードスタッフ、全員が一眼となつて事件に立ち向かっていけると信じてます。まあ、長い挨拶は嫌われるんで、ここで私の一発ギャグを……………ごめんな嘘やウソ、冗談やだからみんなそんな目で見んといて。以上で部隊長、八神はやてからでした。」

パチパチー

「あ、忘れてたわ。みんな、もう一度だけ私の話聞いてくれる？
今、前にいるのが主な隊長さんなんやけど。一人みんな知らない顔があるやろ。まあ、知ってる人は、知ってると思うけどな一応この六課の用心棒みたいな存在のアルベルヒさんに自己紹介してもらおうんで聞いてやってや。」

「今、紹介されたアルベルヒだ。まだ、管理局に入って日が浅いがよろしく頼む。まあ、今この時点で私を快くなく思っている輩もいると思うが、1つだけ言わせてくれ。今、ここにいる一人一人にオレは命がけ守るといまここで誓う。そして、私の力で守ることができる証明したいと思う。みな仲間だ、上も下も一度戦場に行けば関係ない。だから団結力と信頼できる仲間が必要だ、私はみなとそんな仲間になりたいと思っている。これから、よろしく頼む。」

パチパチー

「なかなか立派な演説ありがとうな。私の方がよかつたけどな（笑）。アルベルヒさんは……まあええか。時期がきたら詳しく話したいと思う。実力は本物や。今、ここにいる誰一人とてアルベルヒさん

「には勝てへん。おそろくな。まあ、私も話は聞いていたけど会つのは初めてだから後でじっくり話したいんで、そこんとこよろしくな。」

「ああ。よろしく頼む八神はやて。」

「ほな、解散。」

これから、始まる人生にアルベルヒは子供みたいにワクワクしていた。それを見たレノンには爆笑していたがアルベルヒの暴力と云うか鉄拳で黙らされたのだった。

9話

「アルベルヒ！！今の演説よかったよ。」

ニッコリとした笑顔でこっちに走ってきた。後ろにはなのはとはやてもいる。

「ん？？ああ、キミかフェイト。ありがとう、キミのアドバイスのお陰だ。」

「そんなことないよ、さっき来たんだよね??」

「まあ、いろいろあってな。おかげで、その2人に挨拶できずだ。」

「ふうん、なかなかのいい男やな。では、さっきも紹介したけど八神はやてです。よろしくな、アルベルヒさん。」

「にははは、あ、私は高町なのです。これからよろしくね、アルベルヒさん。」

「ああ、よろしく頼む。」

「アルベルヒさんはフェイトちゃんの部隊を主に入ってもらうけど、ええか??」

「ああ、構わない。」

「アルベルヒ、私たちこれから中央管理局まで行かなくちゃいけないからフォアード陣の訓練を見てくれないかな??」

「そうか、まあオレはほとんど暇人だから訓練なら喜んでみよう。」

「じゃあ、またねアルベルヒ。」

「行ってくるで。アルベルヒさん。」

「ああ、またな。」

フェイトとはやてそう言って行ってしまった。

「行っちゃったね。」

「キミは行かなくていいのか?？」

「私はフォアード陣を見なくちゃいけないから。あと、キミじあなくてなのはって呼んで欲しいかな。」

なのははそう言いながら微笑んだ。アルベルヒは何かこいつには逆らってはいけないと本能的に感じた。

「……………ああ、よろしく頼む。なのは。」

「うん。じゃ一緒に行くっか。」

なのはとアルベルヒが一緒に歩いているとエリオとキャロが近づいてきた。

「アルベルヒさん。」

「ん?? おおエリオ、キャロ。久しぶりだな。元気にしてたか??」

「はい、元気です。」

「僕もです。」

「そうか、ならいいんだ。エリオ、稽古はかかさずしてるか?？」

「はい、アルベルヒさんに教えてもらった魔法と訓練欠かすしてません。」

「うむ、その調子だ。」

アルベルヒはそう言いながら、エリオの頭をなでなでした。エリオは恥ずかしそうだけど、どこかうれしそうな顔だった。

「あ、ズルい。私も、アルベルヒさん。」

「はは、2人とも甘えん坊だな。」

なのははアルベルヒを見て、見た目のギャップの差に驚いていた。アルベルヒが見た目が冷たそうな感じな男だからだ。まあ、実際そうなのだが。

「アルベルヒさんは、エリオとキャロを知ってるの??」

「ん??そうだな、エリオとキャロは息子と娘のような存在だ。」

「にゃはは、なかいんだね。あ、でももう時間だからおしゃべりはこのままで。」

「ふむ、そうだな。エリオ、キャロを守ってやれ。キャロ、エリオをよろしくな。2人とも頑張ってこい。」

「はい。分かってます。」

「はい、わかりました。」

「よし、いい返事だ。」

それから、文字通りエリオ及びキャロはがんばった。そりゃあ、も

う体が朽ちるほど。なのはは初日から飛ばしまくった。アルベルヒはなかなかいい教導だと感心したのだった。

10話

「ヤアアア……!」

「ふん、あまいぞエリオ。」

「うわっ、……いてて。」

「大丈夫か??エリオ??」

「はい、まだまだやれます。」

「よし、いい。」

アルベルヒとエリオは朝早くから鍛錬していた。アルベルヒじしん

槍は得意ではなかったが、セントヘルナには槍の名人と言われた男と友だちだったので槍にはそれなりに知識と技をもっていた。それをエリオに教えてる最中だ。

「エリオ、確かにお前は強くなってる。それは事実だ。だが、昨日はどうだった??思うようにできたか??」

「いえ……アルベルヒさん、どうしてアルベルヒさんに教えてもらった魔法を使っちゃいけないんですか??」

「ふむ、確かにオレがエリオに教えた魔法を使えばラクだが。それに、伴う技と技術をまだ習得していない。分かるだろ??エリオ??」

「はい、でも……。」

アルベルヒはエリオの頭に手をのせて言った。

「まったく……そうだな。一だけなら許可しようか。」

「本当ですか!?!」

「ああ、まあオレは多分フェイトに怒られるがな……。ああ、鬱だ。それでもエリオはしたいのか?？」

「はい!?!お願いします!?!」

「……………エリオ、まあいいか。許可するのは槍が伸びるアレだけだ。わかったな?？」

「あ、はい。ありがとうございます。」

エリオの目がとつてもキラキラしてアルベルヒを見ていた。アルベルヒはまだまだ子供だなと思いつつ、フェイトに対する言い訳を考えたのだった。鬱だ。

訓練所

「はあ〜い、整列。」

なのは空を飛びながら呼びかけた。エリオやキャロ、スバルやテイアナはすでにグロツキーだ。

「じゃあ、本日の早朝訓練ラスト一本。みんな、まだがんばれる??」

いやいや、見て分かんないのかなのはよ。もう、ボロボロだよみんな。ヤッパリまお……………。

「はい!~!」

みんな頑張つて答えた、もちろんなのはに脅された訳ではない。たぶん……………。なのははレイジングハートに呼びかけ準備した。

「私の攻撃を五分間、被弾なしで回避しきるか、私にクリーンヒット入れればクリア。誰か一人でもやられたら、最初からやり直しだよ。頑張つて行こ!!!!!!」

ヤツパリ魔王……だって鬼を超えてる奴は。

「このボロボロ状態で、なのはさんの攻撃を五分間さばききる自信ある??？」

ティアナは勇敢に立ち向かった魔王に……ドンマイ。さすがにみんな無理とティアナに答えた。

「じゃあ、なんとか一発入れるわよ。」

「あの、僕にやらせて下さい。試したいことが、あるんです。」

エリオはそう言いながらイタズラした子供みたいな顔をした。

「わかったわ。ズバル、エリオを頼むわよ。」

「うん、行くよエリオ。」

「はい、ズバルさん！……！」

とりあえず作戦会議は終了した。これから、誰も予想できない結果になるとは知らずに……

「準備はオーケーだね、それじゃあレディゴー！……！」

なのははそう言いながらアクセルシューターを飛ばした。

「全員絶対回避！……！二分以内に決めるわよ！……！」

「おっ……！」

みんないい返事だ。うん。それから、まずはティアナのフェイクとスバルのパンチが上手く決まったが、まだ届かない。なのはのアクセルが戻って、スバルに向かった。逃げる、スバル！！！！

「うん、いい反応。」

なのはさん……もういうことないや、うん。

それから、なんとかスバルに向かったアクセルをティアナは撃ち落とすとした。そして……

「なのはさん、上手くよけて下さい……じぁないと危ないですよ……。」

なのはは急に恐怖を感じた。そして、とっさに防御をした。

「レイジングハート！！！！！！」

《ラウンドシールド》

「ストラーダ、貫け。」

《イエス、ソニックブリットランサー》

エリオがそう言うとストラーダがものすごい早さで伸びてなのはに向かった。そしてなのはのシールドとぶつかった。

「クウウ、だ、れ??まさか、エリオ??」

「貫け!!!ストラーダ!!!!!!」

《イエス!!!!!!》

エリオのかけ声とともになのはのシールドをストライダーが貫き、そのままなのはをビルに吹っ飛ばした。エリオ、ナイス。

「よし、コレで終わりだ。……………あれ??みんなどうしたの??」

「え、エリオ。今、何したの??なのはさんのシールド破るなんて……………」

スバルがそう言うとティアナとキャロも同じような質問をした。

「いや、まあ鍛錬の成果かな。うん、きっと。」

「あんたバカ!? 鍛錬でなのはさんのシールド破れたら誰も苦労しないわよ!……!」

「そつだよ、エリオ…今の技なに??」

「そうそう、今の技はってひいいいい。なのはさん!？」

「エリオ、あとで聞くからね。取りあえず、今朝はここまで。それから……………」

スバルとティアナのデバイスの故障を指摘しながら、なのはは先ほどのエリオの技を考えた。なんだ、今の技は。エリオの資料にはなかったはずだ。あんな、貫通性のある技を受けたのはヴィータ以来だ。なのはは実際本来の自分の力でもあの技は防ぎきれないと思った。あまりに、突然過ぎるエリオの強さになのはは驚くばかりだった。

11話

- 訓練後

みんながロビーに集まるうとしていた時に一台の車が走ってきた。

「あの車って……。」

「あ、フェイトさんと八神部隊長!？」

「すげーい、これフェイトさんの車なんですか?？」

「そっだよ、なのは??どつしたの??浮かない顔して。」

「うっくん、後で話すよ。」

そう言ったのは顔を久しぶりに見るフェイトは心配した。その後、2人は聖王教会に向かった。車の中でカリムについて話し終わった後、はやてがフェイトに質問した。

「フェイトちゃん、ちょっとアルベルヒさんのことで質問してもええか??」

「いいよ、私に分かる範囲なら。」

「あんな、実際の所アルベルヒさんってそんなに強いんか??見た目から見てそうは見えへんけど...」

「そっか、まだみんなアルベルヒの戦う所見てないもんね。帰ったら、だれかと模擬戦すれば分かると思うよ。うん、アルベルヒは多分...私やなのは、はやて、シグナム、ほかの人とは別の強さを持っていると思う。」

「フェイトちゃんにそこまで言わすなんて...、まあええか。フェイトちゃんはアルベルヒさんと戦ったことあるんか??」

「うん、あるよ。負けたけどね。」

「はああ、さすがだな。じゃ、最後の質問や。アルベルヒさんの正体は??？」

「……………資料にある通りだよ。」

「資料つてあんな簡単な資料で分かる訳あるか!!名前もフルネームじゃないし、出身世界も不明。分かることは、フェイトちゃんが信頼してて、強いつてことだけや。最初は腕利きの人を紹介するつてフェイトちゃんに言われて入れたけど、それはフェイトちゃんを信用してからこそで……………本当に大丈夫なんか??？」

「大丈夫だよ、はやて。多分時間がたてばアルベルヒ自身が話すと思う。ほら、聖王教会が見えたよ。」

そう言いながらフェイトは車を走らした。はやては、とりあえずフェイトを信用するしかないため息をつくのだった。

はやてとフェイトが、聖王教会についた頃なのはフォアード陣に新しいデバイスについて説明していた。みんなの顔が喜びで溢れていた。そして最初のアラームが鳴った。その頃アルベルヒは……
「ん〜、いい天気だ。なのになんだこの音は??おい、レノン???わかるか??」

…寝ていた。

《はあああ、久々の登場だって言うのに……。まあ、なんかあったということは確かだな。っておいアルベルヒ??フェイトちゃんから連絡が来てるぜ??》

「アルベルヒ!??今、どこにいるの!??」

「どこって、自分の部屋で日向ぼっこしてるのだが……何かあったか??」

「あるよ!?!アラーム聞いたでしょ??アルベルヒも来て!?!」

「あれはアラームだったのか……了解した、じゃ情報を送ってくれ。」

「わかった、じゃまた。」

「ああ、また。」

そう言って切った後、すぐに情報がレノンに入ってきた。

《アルベルヒ???行くのか???》

「ああ、フェイトの頼みだ。行くぞ、レノン。」

《はいはい、セットアップ》

アルベルヒが黒い光に包まれると、黒で統一された騎士服のアルベルヒが出てきた。これこそが、アルベルヒのバリアジャケットであ

る。

「よし、飛行許可は……あるか。飛ぶぞ、オレの靴を。レノン。」

《ブレイブバードシューズ》

アルベルヒがレノンに用意した靴はあからさまに靴とは言えないモノだったかが一様アルベルヒが独自で作った飛行可能な靴である。

「ふむ、飛ぶのは久しぶりだが……まあ大丈夫だな。」

《ライジングムーヴ》

アルベルヒは光になった。

12話

《アルベルヒ！！前から敵の出迎えた。どうする??》

アルベルヒの前にはガジェットたちが隊を組んで向かってきている。
その数は約50。

「ふむ、面倒だな。レノン??やれるか??」

《誰に言ってるんだ??オレサマはかの有名な孤高の英雄のデバイス
さ。恐れるに足りない、そうだろ??なに、いつも通りやればいい。
まあ、相手が人間じゃないだけありがたいかな》

「確かにな...。」

そう言ったアルベルヒの顔はどこか悲しげな表情だったが、いつも

見慣れていたレノンに取って懐かしい顔だった。

「さあ、始めようか。」

戦いが始まった。

フェイトサイド

フェイトたちは無事にレリックを回収し帰還するところだったが、突如現れた強い魔力反応にみな警戒していた。

「誰だと思う??? フェイトちゃん???」

なのはは膨れ面したフェイトに話しかけた。

「アルベルヒつたら、どこに……なのは??? どうしたの???」

「フェイトちゃん、しっかりして。敵かもしれないんだよ?？」

そう言うてなのははフェイトを睨めつけた。

「う、ゴメン。映像はある??？」

「それが妨害されてるか分からないけど何にも分からないの。」

「そっか、じゃ私が先に言って見てくるよ。」

「……………うん。私が行く。フェイトちゃんはここですって。」

「え???いいけど……………なのは??？」

「何??? フェイトちゃん??」

「えと、気をつけて。」

なのは、軽く頷くとセットアップして出たのだった。フェイトはなのはが行くのを心配そうに見送った。

アルベルヒサイド

「後、何体だ??」

《なんだよ、もうへばったのか??》

「違う、敵かはどうかわからないが誰か来る。分かるだろ??」

アルベルヒはレノンと会話しながら次々にガジェットを見事な装飾

の両手剣で倒していった。

《ふん、まあこのボンクラどもよりマシな奴なのは確かだな。どうする??攻撃でもするか??》

「いや、まずは様子見だ。さっさと片付けるぞ。」

《はいはい、じゃあちゃっっちゃっと終わらせるか。》

なのはサイド

なのは飛びながら相手のことを考えた。敵かはわからないが強いのは確かだった。近づくとつれてます魔力、なにより威圧感がずこかつた。ごくりとなのは唾を呑み込み、みつけた。黒い何かがガジエツトを倒しているのはかるうじて分かったが、動き速すぎて目で追えなかった。

《マスター、どうしますか??》

「うん、とりあえずアクセルの準備だけお願い。」

《分かりました。》

なのはが見守っていると、どうやらガジェットは全滅したらしい。黒い何かは騎士だった。仮面みたいなものをかぶっていたが実力は本物。なのははしっかりとレイジングハート握って言った。

「あの、時空管理局です。ガジェットを倒していただいて、ありがとうございます。つきましては……………」。

「ああ、なのはか。私だ、アルベルヒだ。」

「え???アルベルヒさん??」

アルベルヒは仮面を脱いで素顔を見せた。なのはビックリとした表情でアルベルヒに詰め寄った。

「アルベルヒさん!!今までどこにいたんですか!?!もう、任務は完了しましたよ??」

「何って、ガジェットどもを蹴散らしていたのだが。」

「え、うん。そうだね…………。」

「まあ、この姿をなには見せるのは初めてだからな。後、任務にいけなくてすまん。」

「それは、しょうがないけど…、あ、フェイトちゃんからの連絡だ。フェイトちゃん??どうしたの??」

「なのは??ガジェットの反応が消えたけど大丈夫??」

「大丈夫だよ、アルベルヒさんが全部やっつけちゃった。」

「え、アルベルヒがいるの??？」

「うん、ほら。」

「アルベルヒ!!……その姿は??？」

「ん??私のバリアジャケットだが、フェイトはみたことあるだろ??？」

「……………うん。ゴメン、今日はなんかダメみたい。先帰ってて。」

「そうするよ、久しぶりに戦ったからな。」

《つーワケで、退散するんでは頼んだぜ??なのはちゃん、フェイトちゃん。なのはちゃんには後で正式にオレサマを紹介するから楽しみにしてくれ。アデュー!!》

レノンが喋り終わると一瞬にしてアルベルヒが消えた。なのははと
りあえず一安心した。

《マスター??あのようなデバイス破壊しましょう。目障りです。》

レイジングハートは相当レノンを嫌っていた。

13話

初任務が終わったフォード陣は戻ったとたん疲労が襲いかかり寝てしまった。アルベルヒはみながら先に帰って寝ていたので運悪く夜中に目をさましてしまった。

《アルベルヒ???どうした???こんな夜中に》

「ああ、寝付けなくてな。」

《まったく、ガキじあるまいし……まあオレサマにとってお前はいつだってガキだな。なあアルベルヒ???》

レノンには待機状態のときはネックレスにかかっている黒く小さい剣だった。そのレノンが不気味に笑ったようにアルベルヒは感じた

「ああ、認める。俺とお前は……だからな。」

《ああ??何だった??最後の方が聞こえなかっただけ》

「なんでもない……ん??電話??こんな夜遅くに??まあいい、
ちよつど良かった。」

「アルベルヒさん??起きとる??」

「はやくか、どうした??何かあったか??」

「いや、何も起きてないけどな……ちよつとうちの所まで来てもらっ
てもええか??」

「……了解した、十分で行く」

「ほな、まっとうで〜」

はやての通信が切れた後、レノンがアルベルヒに尋ねた。

《なんだって?? はやてちゃんは???》

「分からん、だが何かしらある……レノン???何か分かるか???」

《イヤ、わかんねえ。けどな、わがマスターとして孤高の英雄としては……分かるだろ???》

「確かにな、俺はあまりにも不明な点が多い。フェイトは別だかな。……レノン、とりあえずは記憶が曖昧で突き通すぞ。」

《はいはい、分かってますよ。わが親愛なるマイマスター。》

「レノン…はやての前でその呼び方をするなよ。うっかり、お前をスクラップにしてしまう。」

アルベルヒはレノンに向けて言った。もちろん、笑顔で。

《分かった、わかった。スイマセン調子に乗りました。だから、その殺気だった笑顔をオレサマに向けないでください。》

レノンは相当怖じ気づいた声でアルベルヒに謝ったのだった。レノン………頑張れ。陰ながら応援してる。多分………

「はやて???アルベルヒだ。」

「ちょうど十分やね、入ってもええで。」

「失礼する。」

アルベルヒがはやての部屋に入ると見知った顔が2つあった。なのはとフェイトだ。

「こんばんは、アルベルヒ。」

「こんばんは、アルベルヒさん。」

なのはとフェイトはアルベルヒに笑顔で挨拶したがどこか威圧的なものがあった。アルベルヒは思考回路を全力で働かせた原因が分からなかった。

「ああ、こんばんは。」

アルベルヒは多少微々ながら挨拶した。

「アルベルヒさん、こんな夜遅くに呼んだのはな。エリオのことや。」

「

「エリオ???エリオがどうした???何かあったのか???」

「まあ、ないっちゃんない。けどな……まあええわ。とりあえず、今朝の訓練の映像みてみ。」

そう言って、はやては今朝の訓練の映像をモニターに出した。

「まあ、普通になのはにじごかれてるな。……何もエリオは普通だが。」

「ちやう。問題は……ここや。」

はやてはモニターを止めてアルベルヒと向き合った。モニターにはエリオがなのは吹き飛ばすシーンが止まっていた。

「さつき、食堂でエリオと話したらアルベルヒさんからあの…槍が伸びる技を教えてもらったから。アルベルヒさんにどういうことが説明してほしくて。」

なのははそう言いながら、アルベルヒを下から覗き込んだ。

「説明もなにも、俺はただエリオに技を教えたただけだ。エリオは強くなりたいたと俺に頼み込んできたんだ。理由は……伏せるが、何エリオなら心配いらぬ。それより、なのは？？油断しすぎだ。相手を甘く見るな。」

アルベルヒはなのはと面と向かって言った。

「……大きなお世話だよ。私が知りたいのは技の説明。教えて、アルベルヒさん。」

なのはは不機嫌そうに聞いた。

「……はやて、このためにわざわざこんな時間に呼び出したのか？」

「まあ、そう考えてええで。後、もう一つあるけどな。」

「ふむ、……いいだろ。あの技は俺の友人の技だ。名をソニックブリット。音速の速さで相手に向かってとぶ弾丸。まず、槍の先に電気を蓄電。その後は槍ごと相手にとばす。実にシンプルだ、槍が伸びるように仕組んだのは俺だがこの画像をみるかぎりエリオは使いこなしているようだな。」

アルベルヒは感心感心と頷いた。

「アルベルヒさん……これ以上エリオのことを強くするのを止めてくれるかな。」

なのはは真剣な顔付きでアルベルヒに言った。

「どつという意味だ?？」

「そのままの意味だよ。エリオが強くなりすぎると他のフォアード陣たちのバランスが崩れてチームワークが乱れるの。だから……。」

「……………なのは。君は勘違いしている。エリオはまだまだ弱い。それは、君もよくわかっているだろ？？確かにあの技は強い。だが、それにとりまなう技術と知識、その他もろもろをエリオは習得してない。あの技は俺のミス……………いや、エリオの才能か。俺はあんなに上手く使えるとは思わなかったんだ。そこは誤算だった。だから、君が言うのなら使用を禁止しよう。まあ、ピンチのときのみなら使っても構わないだろ？？」

「……………うん。」

なのははどこか納得してないような顔だったが、こくりと頷いた。

「じゃあ、エリオの話はしまいや。それで、アルベルヒさん？？あんなは何者なん？？」

はやてはさりげなく今日呼び出した最大の理由を聞いた。

14話

「何者とは、どついう意味だ?？」

アルベルヒは訳が分からないと首をかしげた。

「あんな……わざわざ説明いるんか??アルベルヒさん??」

「……………」

「だんまり禁止や。そろそろわいらのこと信用してくれてもええん
ちやうか??」

はやてとアルベルヒがにらみ合っていると、アルベルヒが視線をそ
らした。

「あたしは、アルベルヒさんのこと信用したい。フエイトちゃんを通してじゃなくて、アルベルヒさん自身を信じたい。アルベルヒさんの資料からはほとんど何もわからへん。アルベルヒさんは演説のとき、あたしらを守るって言ったけど信用はシナイっちゅーことな
んか??」

「……まったく、キミの話はつまいな。感心するよ。いいだろ、そこまで言われたなら話そう。」

《アルベルヒ!??いいのかよ??お前にとっての……》

「レノン??いいんだ。彼女たちなら話しても……いや、彼女たちだからこそ話さなくてはいけないのかもな。」

《ちっ、勝手にしやがれ!!》

《そこのデバイス、主人に対して失礼です。黙りなさい。》

《ああ???なんだと???誰だ、てめえは???》

《私は高町なのはのデバイス、レイジングハートです。》

《レイジングハート???ダハハハ、ダサイ名前だな。よく聞け、このオレサマを誰だと思ってやがる。かの有名な孤高の英雄のデバイス、レノンとは俺のことよ。どうだ???ビビったか???》

《それで???それがどうしたのですか???》

《ダアアアア、てめえもわかんない奴だな。オイ、アルベルヒ???なんか言ってやれ》

「孤高の英雄やて???」

「孤高の英雄って、確か……。」

「……レノン。素敵な紹介ありがとな。」

はやてとなのはどこかで聞いたことがあるその単語を必死に探した。そして、アルベルヒはレノンに向けて笑顔と一緒に腕をあげた。

《ああああアルベルヒ??なんだよ、その腕??そんなに力を入れたらオレサマ、スクラップになるぜ??》

「ああ、よくわかったな。レノン??覚悟はいいか??」

《いやいやいや、ホントスイマセン。あのクソナマイキなレイジングハートって奴がオレサマを罠にハマたんだよ。分かるだろ??オレサマはワルクナイ、絶対だ。》

レノンは自信満々だと言い張った。

「じあ、なんで最初に謝ったんだ??悪気がないなら謝らなくていいだろ??」

《それは……とっさに言っちゃったと言っか……》

「レノン……。じあまたな。」

《うわ、待て待て待て。やめ、うぎあああああ。》

……バキッ

《ダメージ率60%だと!?チクシヨウ…アルベルヒ…!覚えてるよ…!》

アルベルヒの鉄拳によってレノンにひびが入った。

「ふう、すまない。見苦しい姿を見せてしまった。」

「いや、ええんよ?? デバイスの扱いは人それぞれだしな。なあ、なのはちゃん?? フェイトちゃん??」

は yet は非汗をだしながら、なのはとフェイトに同意をもとめた。

「うん、そうだね。」

「じゃははは。」

《哀れです》

2人とも苦笑しながら、頷いた。レイジングハートは陰ながら笑った。黒い……

「では、何から話そうか。」

「まって、孤高の英雄ってどっかで聞いたことがあんやけど……なのはちゃんはどう??」

「うん、わたしもある。確か……あ、ホラ少し前に管理局がスカウトしようとしてた時の人じゃないかな??」

「それや、まってその人は確かセントヘルナの……あ。」

「はやてちゃん??」

「………なんで??どうして??ありえへん。」

「え、何が??」

「あんな、なのはちゃん。最近、セントヘルナって言う世界が消滅した事件があったやろ??孤高の英雄ってセントヘルナで有名な人や。セントヘルナで生きてた人は今は一人もおらへん。だから、ありえへん。アルベルヒさんが孤高の英雄だとしたらいないはずや。」

「………そうだな、だが俺は生きている。なんらかの偶然が重なっ

てな……………」

「アルベルヒ???大丈夫??」

「ああ、平気だ。では、改めて自己紹介しよう。俺の名前はアルベルヒ。シャルトル。今やない、セントヘルナのただ一人の人間だ。そして、今はなきデバイスのレノンだ。」

アルベルヒが言い終わるとはやてが椅子から落ちた。

「はやてちゃん???大丈夫??」

「いたたたた、大丈夫や。こりゃあえらい人がでたわ。だとすると……………」

はやては言おうとしたことを喉にしまった。アルベルヒが言うことが正しいとしたら、この人は1人ぼっちになった。それも、そんじよそこらの孤独ではない。はやてはアルベルヒを心配した目で見つ

めた。なのはもはやてと同じように見つめた。

「2人とも、やめてくれ。そんな心配をされるために話したんじゃない。大丈夫だ。」

アルベルヒはそう言いながら微笑んだ。

「なんでや!?なんで、そんなに平然としてるんや!?私だったら、絶対耐えられへん。だって、そうやる???家族も友達も親も街も全部ないんやで??」

はやては半泣きでアルベルヒに詰め寄った。

「……………そうだな。」

「なんで、そんなに分かったって言う顔してるんや!?ほんまに分かってんか!?!」

「……………はやてちゃん。」

「……………はやて。」

なのはとフェイトがはやてを止めに行った。

「あ……………、ごめん。アルベルヒさん」

「……………いや、気にするな。では、私は寝るとしよう。おやすみ、みんな。」

アルベルヒはそう言つと立ち去つた。

「はやて、言いますね。」

「そつだよ、はやてちゃん???」

アルベルヒが立ち去った後、なのはとフェイトがはやてに詰め寄った。

「うん、わかってる。でもな……いや、やめとこ。あたしがいくら言ったって何も変わらん。」

「うん、そっだね。」

「……………うん。」

「なのはちゃん??どないしたん?」

「えと、私もはやてちゃんと一緒に……私の世界がなくなって1人になったらアルベルヒさんみたいにいられるかなって考えたの。」

「それは……………」

はやては詰まった。もし自分がそうになったら、アルベルヒみたいに絶対いられないからだ。むしろ、自殺するかもしれない。

「なのは??それはアルベルヒが強いからだよ。」

「強い??」

「うん、心が強いって言うかな。最初からアルベルヒはあんな風じゃあなかつけど、でも立ち上がった。だから、もう大丈夫。」

「さすがやな、フェイトちゃん??お熱いことで。」

「え??ちがうよ??はやて、勘違いはよくないよ。」「うん、分かった。分かった。」

「もう、はやてったら。」

「にゃははは。」

はやての冗談でいつもの三人に戻ったが、嘘なのは三人とも分かっていた。普通に戻ったらヤなことばかり頭で考えてしまっからだ。三人は時間を忘れてお喋りした、孤独を感じないように。

15話(前書き)

本当に下手ですいません)。・。・。(ノそれでも、感想くねると嬉しいですのでお願いします!!

はやての部屋から帰ったアルベルトはさっき自分を心配してくれた、はやてやなのはことを考えていた。

「レノン??俺は充分に悲しんだ。はやてたちの言いたいことは分かるが俺は間違えてない。そうだよな??」

《……お前、自分が誰だか分かってるのか??お前はオレサマが唯一認めた騎士で英雄だ。お前は人の顔なんか気にしないで自分の正義にいつも従順だった。だから、いちいち面倒なこと考えるな。お前は正しい。それは今も未来もずっとかわんねえよ。ただひたすら走って走って無様になっても走り続ける。俺が言えるのはそれくらいだ。》

「……………レノン、やっぱりお前は俺の相棒だ。」

《はん、オレサマはお前しかいないからな。まあ、オレサマを退屈させないようにつけてくれや。じゃ、おやすみな。》

「ああ、お休み。」

アルベルヒはレノンの言葉によって自分を再確認し、自信を取り戻すのだった。それから、フォアード陣の朝練は個人指導に移って忙しくなった。アルベルヒはエリオを教えたいと志願したがなのはにダメと言われて、暇を持て余していた。

「いや〜やってますな。」

「初出勤がいい刺激になったのだろうか。」

「確かにな、みな必死だ。いい顔してるな。」

海辺の近くで、シグナムとバイスそしてアルベルヒが雑談していた。

「いっすねえ。若い連中は。」

「若いだけあって、成長も速い。まだ、しばらくの間は危なっかしいがな。」

「違うないな。ああ、暇だ。」

「アルベルヒの兄さん、元気だして下さい。なのはさんもいろいろ考えがあるんですから。」

「……………そうだな。」

「そう言えば、シグナム姉さんは参加しないんで??」

「私は古い騎士だからな。剣をふるうしかない私にはなにも教えてやれんのだ。まあ、それ以前に人にものを教えること自体苦手なんだ。戦闘など届く距離に近づいて斬れとしか言えん。」

「ハハ、凄い奥義なんですけどね。確かに連中にはちょっとはやいっすね。アルベルヒの兄さん??」

「なんだ、バイス??」

「これから、なんか食いにいきませんか??」

「遠慮するよ、悪いな。これから、少し体を動かさなくちゃいけないでな。」

「そいつはしょうがないっすね。シグナム姉さんは??」

「私も遠慮しよう、ところで貴様アルベルヒと言ったな??私と一度、模擬戦をしてくれないか??」

「いきなりだな。まあ、良いだろ。その勝負引き受けた。」

「ふん、主が貴様のことを高く評価していたが実際どうなのか確かめてやる。」

「ソイツは楽しみだ。じゃ、俺も本気で行こう。」

「ふん、場所はここに明日の9時からだ。忘れるなよ??」

「ああ、またな。」

アルベルトは軽く返事すると、どこかに行ってしまった。

「……あの男。なにかあるな。」

「そつっすかね??俺にはそつには見ないですけど。」

シグナムとバイスはそれから自分のしたいことをするために立ち去った。風が強い日だった。明日はもっと強く吹くだろう。

16話

次の朝

アルベルヒとシグナムが模擬戦する話は六課に瞬く間に広がりギャラリーが沢山できた。アルベルヒは別に見せ物じゃないんだがなと苦笑するのだった。

「さて、時間だ。行くぞ、レノン??」

《ああ、分かってるよ。オレサマたちの力見せつけてやるっぜ??》

「ああ、分かってる。」

アルベルヒは軽く体をほぐして力強く歩き出したのだった。

「意外とはやかったな。」

「ふむ、丁度いい時間だと思うが。それより、この人ばかりはなんだ??」

「私も不本意であるが、仕方ないだろう。なにせ、ここに噂の最強の騎士の戦いが見えるのだからな。」

「確かにな。」

「では……レバンティン!!」

シグナムはセットアップしてアルベルヒに剣を向けた。

「さあ、貴様も獲物を抜け!!」

「ふん、血の気が多いヤツだ。レノン??」

《はん!!行くぜ、セツトアップ》

アルベルヒはレノンの黒い光に包まれて黒い騎士になった。そして、何も無い目の前に手を伸ばして言った。

「……………レノバティオ、顕現。黒き剣は、我が魂にして闇。その剣、我がいにしえの契約により力を我に与えたまえ。」

アルベルヒがそう呟くと黒い見事な装飾の両手剣が現れた。アルベルヒが剣をつかんで言った。

「俺の名前はアルベルヒ、そしてデバイスのレノンだ。お前は??」

「ベルカの騎士、シグナムだ。そして我が剣のレバンティン。」

「剣か、刀と言ったほうがいいか。そして、ベルカの騎士……まあ、わからないことが多いのはお互い様だな。」

「ふん、ではいくぞ!！」

「来い、シグナム。」

戦いが始まった

ギャラリーサイド

なのはたちはビルの上で他のギャラリーと一緒にアルベルヒとシグナムを見ていた。

「とうとう、アルベルヒさんの戦い見えるな。しかも相手はシグナムや、オッズはだいたい6対4でシグナムの方が勝ってるんやけどな。」

「はやて???ダメだよ???賭け事なんて。」

「冗談やて、冗談。もうフェイトちゃんはすぐ本気にするんやから。さてと、あ、シグナムがセットアップしたで??」

「フェイトちゃん、アルベルヒさんは確かに強いと思うけど……シグナムには勝てないんじゃないかな??孤高の英雄でも……。」

「……なのは。その言葉は後悔することになるよ。まあ、見たら分かるよ。びっくりするから。」

フェイトはそう言って試合に集中しだした。なのはもシグナムがアルベルヒに突っこむのを見ながら試合に集中した。

アルベルヒサイド

「一気やるぞー!!レバンティン、カートリッジロードー!!」

《カートリッジロード》

シグナムがかけ声とともにアルベルヒに突っ込んできた。レバンティンからガシャンと機械音が聞こえると、剣が炎まつた。

「紫電一線!!!!!!」

シグナムは勝ったと感じた。なんだ、呆気ないと思いながら剣をアルベルヒに下ろした。だが現実は甘くない。

ガキンッ

「バカな!?受け止めただと!?」

アルベルヒはなんてことはないと平然と受け止めた。

「なんだ?? シグナム?? この技はお前の必殺技か?? だったら、お前じゃ俺には勝てない。」

シグナムはすぐ剣を引いてアルベルヒから距離を取った。

「レノン?? 準備は??」

《ああ、大丈夫だ。ブレイブバードシューズ》

レノンがそう呟くとアルベルヒの足に靴とは言い難い靴が現れた。

「なんだ?? その靴は??」

「ふん、俺は元々飛べないでね。この靴は飛ぶための道具だ。じゃ、今度はこっちの……番だ!……!」

《ライジングムーヴ》

シグナムの視界からアルベルヒが消えた。シグナムはフェイトとの戦いで多少は速さには慣れていたがアルベルヒの速さは別格だった。気がついたらアルベルヒは自分の後ろにいた。

「……………終わりだ。」

アルベルヒは冷たい表情で剣を下ろしてシグナムをビルに叩きつけた。

「……………やったか??」

《アルベルヒ!?!?なんか上から来るぜ!?!?》

「チツ、レノン!?!敵の場所は!?!?」

アルベルヒは鞭をとっさによけてレノンに聞いた。

《場所は……目の前だ！！！》

「何??？」

アルベルヒが前を見るとシグナムが歩いてこっちに向かってきた。

「驚いたな、あの距離でかわすなんて。」

「いや、俺の方が驚きだ。あれを受けて立ってるなんてな。」

アルベルヒとシグナムは互いに剣を構えなおした。

「じゃ、仕切り直した。」

《ライジングムーヴ》

アルベルヒはまたシグナムの視界から消えた。アルベルヒの強さはこの異常な速さだった。誰も触れることの出来ない速さがアルベルヒを英雄にまで仕立て上げたのだ。この速さに絶対の自信があるアルベルヒは次で終わりだと思った。だが、シグナムはアルベルヒの剣を止めた。

ガキン

「ツツ、なに!？」

「お前は速い、だが技の威力が弱すぎるな。もう、お前の速さには慣れた。」

シグナムはアルベルヒの剣を弾いて体当たりをしてアルベルヒの体勢崩してレバンティンをアルベルヒに叩き込んだ。

「グワツツツツ。」

アルベルヒはビルに吹っ飛んだ。

「くそ、シグナムがこんなに強いなんてな。でも、勝つのは俺だ。レノン??? 技の威力が弱いだと。どうする??。」

《今、あの女はお前を速さだけの男だと思ってやがる。チャンスだ、アルベルヒ??? あの刀ごとあいつを斬れ》

「わかっている、レノン??? カードリッジロード」

「そこか!?!」

シグナムがアルベルヒの場所に気づいて連結刃をアルベルヒに向けた。

《カードリッジロード》

ガシャンとレノンから機械音になるとレノンから黒い霧みたいなものが黒い剣の刀身にまとった。

「行くぞ！！シグナム！！」

アルベルヒはシグナムの攻撃を交わして突っ込んだ。シグナムはとっさに刀に戻してレバンティンに炎を宿らしてアルベルヒに向かった。

《ライジングムーヴ》

シグナムの視界からまたアルベルヒが消えたがシグナムには感覚的に分かっていたので、それに合わせてレバンティンを思いっきり振るった。私の勝ちだと。

「紫電……一線!」

「……カットロース」

狂犬剣

アルベルヒはそう呟いてシグナムに剣を下ろした。シグナムの剣とアルベルヒの剣がぶつかりと不思議なことが起きた。シグナムの剣の炎がだんだん消えていった。そして……

ザンツッ

「バカな!？」

アルベルヒはレバンティンを斬ってシグナムにそのまま剣を振るった。

シグナムはアルベルヒに斬られるとそのまま地上に落下した。寸前のところでアルベルヒが助けて、模擬戦は終わった。ギャラリーは驚きの連続だった。シグナムが自分のデバイスを斬られて負けるなんて誰が想像できたろうか。しかも、シグナムはヴォルケンリッターの烈火の将であり歴戦の騎士だ。それが惨敗。ギャラリーは改めてアルベルヒの強さを認めざる終えなかった。

17話

シグナムとの模擬戦が終わった後、シグナムはすぐに目を覚ました。その後、アルベルヒはシグナムとの所に行った。

「大丈夫か??」

「ん??ああ、お前が平気だ。こんなになっただのは久しいがな。」

「そっか、なら安心だな。」

「一つ聞きたいことがある。最後のあの技はなんだ??」

「ふむ、あれはカットロースって言う技だ。意味は狂犬剣……触れるモノを食らい、食いちぎる。故にあれで斬れなかったモノはない。原理は秘密だ。」

また勝負しようと言ってアルベルヒはシグナムの所を立ち去った。シグナムは改めて自分が戦った相手に恐怖した。だが、そこはバートルマニアと言われることあって、すぐにライバルが増えたなど苦笑するのだった。

とある施設

一人の男が暗い不気味な通路を歩いていた。あちこちに人間だったものがカプセルに入って、管理されていた。

「ゼスト、ルーテシア活動を再開しました。」

「ふむ、彼からの支援は??」

「彼らに無断での支援はなるべくひかえるようにとメッセージが届いております。」

「自立活動したガジェットは私の完全制御と言っわけでないんだ。かってにレリックのところ集まるのは多目にみてほしいね。」

「お伝えしておきます。」

「彼らが動くならゆっくり観察させてもらっよ。彼らもまた大切な実験体なのだからね。ところであの男についてはどうなっているんだね??」

「はい、調べによると彼は今はないセントヘルナの唯一の生き残りだそうです。名をアルベルヒ、孤高の英雄とまで言われた男です。戦闘力は一騎当千……独りで何千の兵を相手にしたと聞いています。今のところはほぼなんの関与もしてないですが、のちのちドクターに立ちはだかるかと思えます。」

「ほ、その男……まあいい。レポラウスの準備はどうかね??」

「はい、ドクターの指示通りに衛星の軌道上にすでに待機しています。御命令ならば、すぐに動かせます。」

「それはうれしい限りだ。ふ、ハハハハハハ。管理局の諸君それと
機動六課、恐怖し、混乱し、絶望に落ちたまえ。ふ、ハハハハハハ
ハハハハハハ。」

男の歓喜の音が通路に響いた。男はこれから起きる未来を想像して
笑った。男、ジェイル・スカリエツィは何を起こすのだろう。そ
れは、アルベルヒをのちのち死に至らすほど脅威だった。

アルベルヒとシグナムの模擬戦の後、すぐに任務がきた。

ホテルアグスタの会場警備だ。

アルベルヒは聖王教会に呼ばれていたので、ホテルアグスタにいけなかった。

呼ばれた理由はアルベルヒ自身のリミットをかけるためである。アルベルヒはもともと正確なランクはなかったが、アルベルヒの活躍が上層部の耳入ったらしく、はやてに頼まれてしぶしぶ行くのだった。アルベルヒは数日間、検索や質問その他もろもろやったので疲れきって夜中アルベルヒは機動六課に戻ってきた。

「つ、疲れた。……やりすぎだ。……そうは思わないか??」

《お前はいい方だよ。オレサマなんか……いや、辞めとく。オモイダシクナイ》

「お互いよくここまで頑張ったな。」

《あゝ、とこころで何だ？？この音？？》

「それは、分からん。少し様子を見てくる。レノン？？」

《はいはい、お人好しのアルベルヒ。セットアップ》

アルベルヒは用心しながらコッソリ森のほづに歩いて行った。

バン、バン

《リロード》

「ぐつ、ハアハア。まだ……今度は1000お願い。」

《マスター、休んだ方が……》

「うるさい、私はこんなところで…こんなところで終わる訳にはいないの。私は証明しなくちゃいけないんだから。」

《…わかりました。》

アルベルヒはティアナが練習をしているのを見てなんとなく、昔の自分を見ているような気がした。アルベルヒはティアナに近寄った。

「どうしたんだ??こんな夜遅く。」

「ハアハア、何って練習ですよ。見てわかんないですか??アルベルヒさん。」

「ふむ、そんなに疲れきった体で何をしても体に負担をかけるだけだ。まあ、言った所でやめる気はないだろうがな。」

アルベルヒは苦笑した。

「……。注意しないんですか??」

「まあな。あまり、無理するなよ。」

「く、私はそれでも……無理して練習しないといけないんです。凡人なもので……。」

「……凡人か、確かに凡人は技や才能がないからな。努力するしかない……よく、分かる。決して一流にはなれない。俺もその一人だ。」

ティアナは練習をやめてアルベルヒと向き合った。

「あなたが凡人??からかっているんですか??私はちゃんと、あなたとシグナム副隊長の戦いを見ました。あなたは凡人ではありません。」

「ふむ、では凡人である証拠を話そう。俺は、おまえみたいに魔力弾を作れない。いや、作ることができない。」

「え！？そんな、ありえないです。基礎中の基礎ですよ？？」

「そうだ、だから俺は剣を振るうしかなかった………練習して、練習して血反吐を吐いてでもただ剣を振るった。目的のために強くならなければいけなかった。」

ティアナはアルベルヒを見つめた。

「その目的ってなんですか??？」

「人を助けたい。弱い人々を救える強い人になりたかった。ただ、それだけだ。」

「………そんな、曖昧なことのために。」

「ああ、そして今の強さになった。お前は何のために頑張る?? 自分のためか?? それとも…」

「私は……証明するためです。」

「……そうか。ティアナ、お前は俺なんかよりずっと才能があつて凡人ではない。自分を信じる。俺は、おまえに的確なアドバイスはできないが一つだけアドバイスすることができる。常に自分の最強をイメージしろ。どんな相手にも負けない自分を。」

「最強の…自分??」

「そうだ、外敵なんかいらぬ。イメージしろ。俺が言えるのはそれぐらいだ。」

アルベルヒはじあなと言つてその場から去つた。ティアナはアルベルヒの言葉を噛み締めながら練習を再開した。それから数日、ティ

アナの特訓の成果を見せる時がきた。

「さて、2001で模擬戦やるよ。まずは、スターズからやるうか。バリアジャケット準備して。」

「はい!!」

なのはは飛びながらティアナとスバルに言った。それから2人はなのは向き合った。

「やるわよ、スバル。」

「うん。」

戦いが始まった

そのころ、アルベルヒはフェイトと一緒にビルに向かって走っている

た。

「もう、アルベルヒが寝坊するから。」

「すまない、でもほら着いたぞ。」

「すぐごまかす。模擬戦はじまった?？」

「フェイトさん、アルベルヒさん。」

エリオがまだ始まってませんと言った。それから、フェイトとアルベルヒはなのはの所を見始めたのだった。アルベルヒはティアナを見て少し笑った。なんだ、ちゃんと頑張っているなど。だが、ティアナがなのはに突っ込んだ辺りからアルベルヒが変わった。そして、なのはが朦朧としてるティアナを潰そうした時、動いた。

《ライジンググムーヴ》

ティアナサイド

私は、なのはさんを見て思った。

ああ、自分は何を頑張っていたんだろ。

こんなにも感じる距離はなんだろ。

アルベルヒさんは自分に自信を持ってって言ったけど、こんな私にはもてるはずがない。

終わった…なにもかもがどうでもよくなった。私は目を瞑った。でも、いくらたつても自分に来るはずの衝撃がないから目を空けてみた。目の前には自分にアドバイスしてくれた人がキレイな花を咲かせていた。6枚の赤い花弁の花だ。それに、とても大きくてまるで盾みたいな花だった。ふいに、声が聞こえた。

「もう、休め。おまえの努力は無駄じゃない。」

その言葉はともうれしくて、でも体はもう言うことを聞かなくて……私は意識を失った。

アルベルヒサイド

赤い花を消して、倒れるティアナを支えた。そして、なのはと向き合った。

「……………なんのつもりだ？？高町なのは……。」

アルベルヒは静かに顔上げて、なのはに殺気だった。

「……………」。

「なんのつもりだときいている。」

「…そつちこそ、なんのつもり??わたしの教導の邪魔しないで。」

「教導??これがか??ティアナをつぶし、スバルにまるで親の仇のように睨まれるのがおまえの教導か??」

笑わせるとアルベルヒは笑った。

「…………わたし、言ったよね??邪魔しないでって。」

なのはは暗い顔つきでアルベルヒと向き合った。

「レイジングハート、セットアップ。」

《わかりました、セットアップ》

なのははバリジャケットを着てアルベルヒにレイジングハートを向けた。

「アルベルヒさん??あなたも少し頭を冷やさないといけないね…」

「ふん、おまえがどれだけ教導に力を、思いを入れていたか理解したつもりだったがな。どうやら見当違いのようだ……レノン??」

《ヨッシャー!!!そこなくちゃ、おもしろくねえ。さすが、アルベルヒだ。クレイジングハート??いつかの怨み晴らさせてもらうぜ???セットアップ》

アルベルヒはティアナとスバルを近くのビルに移した。そして、バリアジャケットを着て、何も無い目の前に手を伸ばして黒い剣を取り出した。黒い剣をなのには向けた。

「俺が間違ってるかもしれない。…でもな、あいつの努力は認めなくちゃならない。凡人なりに強くなるうとしたあいつを……おまえが俺に剣を向けるなら俺は全力でおまえを……。」

「御託はいいから……いくよ??わたしは間違ってる……レイジングハート??」

《アクセルシューター》

「ふん、レノン……!」

《ライジンググム》

戦いが始まった

ギャラリーサイド

「どうして、なのはとアルベルヒが戦ってるんだよ。」

ヴィータがフェイトに聞いた。

「……わからない。でも、アルベルヒはアルベルヒなりのりゆうがあると思う。」

フェイトは不安そうにアルベルヒの方を見ながら答えた。

「ったくよ、アルベルヒのやつなに考えてんだよ。あれ止めるか？」

「止められると聞いて……」

「……いや、無理だな。」

「…っん。」

ヴィータとフェイトはため息をだしながら戦いを見守る他なかった。エリオとキャロも2人の後ろに隠れながらひっそりと見守っていた。

アルベルヒサイド

なのはとアルベルヒの戦いは、圧倒的にアルベルヒの方が有利だった。アルベルヒの速度が異常だったからである。しかし、アルベルヒがいくらの後ろをとってもアルベルヒの攻撃が当たることはなかった。

「ハアアアアア、ヤッツツツ!」

《フラッシュムーヴ》

「ハアハア、まただ。なんで、避けられる……俺の動きが読まれるのか?？」

《アルベルヒ??多分な、あのクレイジングハートのせいだ。》

「ハアハア、なんだと??」

《あの野郎が、大体の行動パターンを分析してやがんだよ。まったくいい性能してるぜ。》

「そうか、ならスタイルを変えよう。レノン??エバアラルだ…。」

月夜の吸血

アルベルヒは静かにそう呟いた。

《エバアラルソード》

黒い剣の刀身がだんだん赤い色に染まっていった。なのはは赤い刀身を見て、本能から恐怖した。

「……なんなの……あの剣……レイジングハート??」

《すいません、マスター。ですが、近づくとくべきではないかと……なにか、やな予感がします。》

「うん、そうだね。アクセルをできる限りだして。バインドで、止めて一気にデイベインバスターでやるから。」

《了解しました、アクセルシューター》

なのはは計108発の魔力弾をアルベルヒに向けた。そして、不規則に放った。

「……………かかったな。」

アルベルヒは不気味につぶやいた。アルベルヒはなのはの魔力弾を
あろうとか、剣一本でしのごうとした。あまりに、無謀だったが英
雄とまで言われたアルベルヒの剣はなんなく防いだ。そして、な
の目には剣が魔力弾を吸収しているように見えた。

「レイジングハート…もしかして…。」

《はい、あのくそデバイスにSランク相当の魔力が宿っています。》

「高町なのは、レイジングハート……………気をつける。この技は唯一の
飛ぶ斬撃だ。心して避ける…。」

アルベルヒは剣を肩に担ぎながら構えた。そして……………

「……………失え。クラ……………ナド。」

懺悔の男爵

《クラナドブレイカー》

アルベルヒはなのはに黒い斬撃を飛ばした。その大きさはあまりに大きかった。

「っ、レイジングハート！！最大質力でいくよ！！！」

《ディバインバスター》

なのはは避けるのは無理と判断して、迎撃した。アルベルヒの斬撃となのはの砲撃がぶつかると、ものすごい反動があたりを襲った。2人ともリミッターを付けているにもかかわらず、本気でいった。だんだん、なのはの砲撃が押されてきた。

「っ、クウウウ、耐えて…レイジングハート…。」

《しかし、マスターの体が……》

「いい、から……あ、……。」

なのはにアルベルヒの斬撃が当たった。アルベルヒの斬撃はなのはの砲撃を縦に切り開いたのだった。辺りに煙でいっぱいになった。

「ハアハア、どうだ?? やったか??」

《いや、まだらしいぜ??》

煙が晴れるとボロボロなバリアジャケットで大きな魔法陣をひらくなのはがいた。

「くそ、レノンー!!! っっっっっ、なんだこれは!?!」

アルベルヒが動きだそうとすると、あらかじめ仕掛けてあったのはのバインドがアルベルヒを縛った。

《アルベルヒ！？くそ、拘束系の魔法か！！》

「……………受けてみて、私の本気……………」

《スターライトブレイカー》

「ちっ、レノン！！急げ！！片腕だけでいいから、早くしろ！！！」

《クソ、なんてカタいんだ！！！！》

「全力全開……………スター……………ライト……………」

「レノン!!!!!!!!!!!!!!」

「ブレイカアアア!!!!!!!!!!」

なのはの砲撃が襲う寸前、アルベルヒの片腕のバインドがはずれた。

「ツツツツ、レノン!!!!!!!!!!」

《アイアスシールド》

アルベルヒは両足と片腕を拘束されているにもかかわらず、片腕を前に突き出した。そして、ティアナを助けたあの6枚の赤い花弁の花を出現させた。

「くそ、なんてバカ魔力だ。」

《アルベルヒ！！シールドがもたねえ！！》

一枚、また一枚と花びらが散っていった。そして、最後の一枚になった。

「く、うぐ、ハアアアア！！……あ……」

アルベルヒは最後の一枚に全魔力をそそいだが破られた。なのはの砲撃がアルベルヒをビルに吹っ飛ばした。

「ツツがはツツ。く、ハアハア、うぐ、ハアハア。」

アルベルヒは剣を杖のようにしながら、必死に立った。

《アルベルヒ！！立て！！お前は負けちゃいけねえんだ！！英雄は負けちゃいけねえ！！そっだろ！？自分の正義を貫けよ！！》

「ぐ、わかつ…て…る、ハアハア、」

アルベルヒは必死に歯を食いしばって剣を構えた。なのはは自分の最強の砲撃をうけて立っている初めての人に純粹に驚いていた。

「……アルベルヒさん、もう止めよう。」

「ハアハア、な…んだ…と??」

「私も調子に乗りすぎたみたい、だからおあい。」

「ハアハア、なら…い…い…だろ。」

「うん、それに…わた…しも。」

なのははそういいかけて地面に倒れた。

《マスター！？》

「ハアハア、レノン??あとは…た…の…む。」

アルベルヒはそう言うと横に倒れた。

《アルベルヒ！？》

こうして、壮絶な戦いは幕を閉じたのだった。これからアルベルヒはどうなっていくだろうか。フェイトに助けられるアルベルヒの顔はどこか晴れ晴れとしていた。

20話

なのはとの戦闘のあと、アルベルヒはシャマルによって傷は治ったがまだ寝ていた。隣には、ティアナがぐっすり眠っている。なのはは、すぐに起きたらしくこの部屋にはいなかった。

二時間後

「ん……………」

ティアナは起きると、辺りを見渡した。

「あ、アルベルヒさん??どうして……………」

「目が覚めたのかしら??」

「シャマル先生、あの…」

「はい、言いたいことは分かるけど…ちょっと話を聞いてね。」

「あ、はい。」

「ん〜、見たところあなたは以上はなさそうね。さて、どこから話そうかしら。まず、あなたが昼間の模擬戦で撃墜されたの覚えてる??？」

「はい……。」

「そう、でもねまだ続きがあつたの。アルベルヒさんがなのは隊長に怒ったのか、どうかは知らないけど。なのは隊長と戦い始めて…それも本気の実戦だったって聞いたわ。凄まじいモノで、周りは止めることが出来なかった。最後は、ドロ―で終わっただらしいけどね。」

「そんな……もしかして私が原因ですか??」

「ん〜、なのは隊長が言うには意見の違いかららしいんだけど……まあ、そんなに気を悪くしないほうがいいわ。アルベルヒさんに聞くのが一番はいいし……」

「そう、ですね……今は、ええ!??9時ってことは夜ですか??」

「凄く熟睡してたわよ。死んでるんじゃないかって思っただけ。……最近、ほとんど寝てなかったでしょ??溜まった疲れが、まとめてきたのよ。」

ティアナはシャマルの話を聞いて、自分がしたことに改めて落ち込んだ。

アルベルヒサイド

オレはどうしたんだ??

なぜ寝ている??

それに、ここは……

『お前が、新しい主って訳か……名は??』

「アルベルヒ、ただのアルベルヒだ。」

『はん、こんなちっこいガキがオレサマをもつなんてな……まあ、いいだろ。このオレサマを誰だと思ってやがる。オレサマはかの有名なデバイス職人、
が作った最高傑作、レノバティオだ。心して使え。』

「よく、分かっている。レノン。オレは、人を助けるために強くなる。だから、お前の力が必要だ。誰にも侵害されない究極の結界術すなわち
を持つお前が……。」

『はん、いい度胸じゃねえか。それに、いい目だ。いいだろ、よろ

しくなアルベルヒ。』

これは……………

「アルベルヒ！？止める！！お前1人で、どうなる相手じゃない。分かるだろ！？」

「ああ、でもな。オレは間違えてない。そうだろ??」

「確かに、そうだ。お前は間違えてない。だけど、だけど！！死ぬぞ！？あの、人に楯突いて生きてる人はいない！！お前だって怖いだろ！？」

「それでも、オレは行かなくちゃ。いつか、オレは死ぬ時が来る…
…でも今日じゃない。今日じゃないんだ！！レノン！！」

『セットアップ』

「お前……まさか……。ふん、分かったよ。んじゃ、いっちょ正義の味方になりますか。イザベラ！」

『セットアップ』

「なあゝに、死ぬ時は一緒さ。なあ、アルベルヒ？」

「ああ、すまない。」

オレの記憶なのか??

「ハアハア、悪いやつち、まった。がはっ」

「ああ、わかったから。もう喋るな。頼むから……。。」

『テレポーション』

「な！？ジーノ！！お前！？」

「お前は、この世界にとっての希望なんだ。だから、頼むぜ？？アルベルヒ。」

「ジーノオオオオ！！」

やめろ、頼むから。この先は……

「アルベルヒ？？わたくしはあなたの剣となり盾になります。だから、1人にならないで下さい。」

「アルベルヒ？？どうしたのですか？？」

やめろ！！

「わたくしはアナタにとっての何ですか?」

「アルベルヒ、わたくしは……。」

やめる!……!……!

「あ、るベルヒ。しく、じり、ました。わたくしは……。」

やめるおおおおおおお!……!……!

「やめるおおおおお………ハアハアハア、夢か………チクシヨウ………」

アルベルヒは、起きて外の空気を吸ってこようと、行ってしまった。
アルベルヒの苦悩はまだ誰も知らなかった。

21話

アルベルとはゆっくりとした足取りで気がつけば海辺にいた。

《ったく、どうしたんだよ??お前らしくない……夢でもみたか?》

「……ああ、しかも最低な夢をな……」

《最低ねえ、まあこれ以上ないってところまでお前は落ちたんだ。だから……おっと、誰か近くにいたいだぜ??》

「ん???誰だ???」

《あゝ、こいつは……なのはちゃんとフェイトちゃんかな》

「…そうか。」

アルベルヒは今日の模擬戦について、なのはと話そうと思いなのはのところに向かった。アルベルヒが行くと、2人が六課に戻るところだった。

「あ、アルベルヒ！？体はもう平気なの！？それに、なんで普通に歩いてるの！？ダメだよ、早くベッドに戻って休まないと！！」

「平気だ、フエイト。心配かけたな。それに、なのは……今日の模擬戦のことだが、すまん。調子に乗りすぎた。だが、オレはお前のティアナとスバルに対してのアレは正直やりすぎだと思う。なにかしら理由があるとは思うがな。」

「……うん。ごめんなさい、私もやりすぎたとは思う。私は、あんまり今日のこと気にしてないから。だから、この話は終わり。ね？」

「ああ、わかった。なのは、体のほうは……」

ピーピー

「!?!?」

「!?!?!?」

「これは、アラームか?」

「フェイトちゃん!」

「うん、ほらアルベルとも行くよ!」

「了解した。だからフェイト、あんまり強く引っ張るな。」

「いいから、早く!!--いくよ!!--?」

アルベルヒはフェイトに腕を引かれながら、連れていかれた。このあと、ガジェットをなのはとフェイトとヴィータが撃墜すると聞いた、アルベルヒは見送りだけでもしようとするところに向かった。

「今回は、空戦だから。だから、私とフェイト隊長とヴィータ副隊長で行くから。だから、よろしくね。」

「みんなはロビーで出動待機だから。」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ。」

「はい」

「あ、はい。」

「あ、それからティアナ。ティアナは出動待機から外れておこっか。」

「

「!？」

「え!？」

「そのほうがいいな、そうしとけ。」

「今夜は体調も魔力もベストじゃないから……だから、」

「……言うこと聞かない奴は、使えないってことですか??」

「……自分で言ってるて分からない??当たり前のことだよ、それ。」

「現場での指示や命令は聞いています!!教導だってサボらずにやっています!!それ以外の場所での努力まで教えられた通りにやらな

いとダメなんですか！？わたしは、なのはさんたちみたいにエリートではないしスバルやエリオみたいな才能もキャロみたいなレアスキルもない。…少しくらい、ムチャして死ぬ気でやらないと強くないじゃないですか！！」

ティアナは突然肩を掴まれたと感じると、すぐ目の前までシグナムの拳が目の前に迫っていた。とっさに目を閉じているとアルベルヒがシグナムの拳を止めていた。

「貴様！？なんのつもりだ！？」

「ふん、お前こそなんのつもりだ？殴ったところで何も変わらんだろ？？ティアナもティアナだ。今は大人しくしとけ。わかったな？？」

「でも！！」

「ティアナ、それ以上は何も言つな。分かっているから、お前の気持ちには……だから、な？？」

「わかり、ました。」

「バイス、頼む。」

「あ、はい！！わかりました。アルベルヒの兄さん。」

なのはがへりに乗り込んで行くときにティアナに言った。

「ティアナ！！なんかいろいろ困惑してるみたい、だけと帰ったら
いっばいお話しよ！！」

そう言ってなのはたちはいつてしまった。あとに、残ったアルベル
ヒたちは何ともいえない空気に包まれていた。

22話

「…らしくないな。すまん、オレは海岸の方にいるから何かあったら連絡してくれ。レノン??」

《セットアップ》

アルベルヒはそう言って海岸の方に行ってしまった。ティアナたちを残して……

ザザーン

「波の音がいいな、ここは……なあ、レノン??」

《ああ、確かにな。いままで戦いだけだったしな。ま、余分なこと考えなくてよかったし……で、今のお前はどつよ??》

「……………分からない。」

《はん、今まで黙ってたけどな！お前は誰だ！？孤高の英雄だろ！？お前、孤高の意味分かってんのか！？確かにな、フェイトちゃんには恩があるとは思うがな……なんで、お前が孤高の英雄って呼ばれるか思いだせよ……アルベルヒ、お前は目の前で仲間が死んでいくのに嫌気がしたんだろ？故に孤高を目指したんだろ？誰にも頼らない強さ…それがお前の強さだ。だから…》

「……………レノン。それは解る、だがもうオレの守りたい人はいないんだ。全員死んだ…世界ともにな。オレは何をしたいとか何をするべきかも分からないんだ。欲望がないと言っていい。だから、今はフェイトに言われた通り目的を探すために生きてる…それに、今の生活はそれなりに満足はしている。オレができることは剣を振るうことだけ…何の才能がない凡人だ。だから、あいつらを守る剣になりたい。あいつのようにな……………」

《まあ、しょうがないか。お前の人生だしな……………アルベルヒ？？一言いわせてもらうぜ？？お前は人として壊れてる……何がお前をここまでやらしてるかは分からないが、私欲がなく全てほかの人のために動くお前は……………なんでだ？？》

レノンにそう言われたアルベルヒは全身が震えた。なんでだ?? オレはなんでこんなにも弱い人を助けたいんだ?? 理由は……あつた。

「…約束だ、もう誰としたかは覚えてないが。弱い人のために剣を振るえ、強い人には屈するな…ただその言葉は有り得ないくらい心に響いて…いつの間にかそれはオレの生きるための規則のようになってしまった。ただそれだけだ……。」

《お前……そんなちっぽけな事で……まあ、しょうがないか。お前らしいよ、アルベルヒ。話は終わりだ、誰か来たみたいだぜ??》

「なに??？」

「あの……アルベルヒさん??？」

アルベルヒが振り向くと目を赤く腫らしたティアナがいた。

「…どうした??」

「あの、有り難うございました!」

「オレは礼をされる覚えはないが……。」

「いえ、私にはたくさんあります!!アルベルヒさんに覚えがなくても私はアルベルヒさんに感謝したいんです」

「ふむ、それで??」

「あ、えっと……」

「まあ、その感謝ありがたく貰っとくよ。」

アルベルヒはそう言ってティアナの頭を撫でた。

「あ……子供扱いしないでください。」

「はは、いや失礼した。まあ、何があったかは知らないがもういる解決したんだろ??」

「はい、もう大丈夫です。」

ティアナは笑顔でアルベルヒに言った。

「そうか、よかったな。おっと、もう夜も遅い。早く部屋に帰って休んだほうがいいぞ。」

「分かりました、お休みなさい。」

「おやすみ。」

ティアナはアルベルヒの顔を見ると顔を赤くして戻っていった。アルベルヒも戻ろうとしたときに後ろから声がした。

「…いい雰囲気だったね。アルベルヒ??」

アルベルヒが振り向くと背中に黒い死神を宿したフェイトがいた。

「ふ、ふえ、フェイト???どうしたんだ??」

アルベルヒは思考回路をフルに使って考えたが分からなかった。

「…なんでかな??今、私すごくイライラする。私さ、アルベルヒのこと心配で急いで戻ってきたのに!!!ティアナといちゃいちゃして…!!!」

フェイトの周りがバチバチとし出した。電気を蓄電してるんだろう、きつと。

「フェイト待つんだ！……オレは何もしてない……！」

「……もう、終わりだよ……！」

「なにが！？」

「バルディッシュ……！」

《セツトアップ》

「ヤバイ、レノン……！」

《セツトアップ》

23話

フェイトに黒こげにされたアルベルヒは寝ていた。とにかく寝ていた。だが、アルベルヒはフェイトに叩き起こされた。

「起きて……!!アルベルヒ……!!事件だよ……!!」

「ん、うるさい……エミリヤ……。」

「む……アルベルヒ……!!」

フェイトは怒鳴りながらアルベルヒを電気ショックを食らわした。

「ワアアアアア、ちよ、やめ……ってフェイト!?何するんだ!?!」

「エミリヤって誰！？アルベルヒ！？それにじ・け・んだよ……！
寝てる暇ないよ……！後、エミリヤって誰よ……！」

「フェイト落ち着け……！とりあえず、後ろのバチバチを押さえてく
れ……頼む……！」

「むむ、そうだね。だけど、後でエミリヤって誰か聞かせてもらっ
から。」

そう言ってフェイトは充電するのを止めた。

「はあ、理不尽だ……」

「何か言ったの？？アルベルヒ??？」

フェイトはニッコリ笑った。

「イヤ、それで??事件は??」

途端にアルベルヒはマジメな顔になった。

「うん、レリック絡み。手伝つて。」

「ふむ、フェイトの頼みだ。引き受けた。」

「じゃあ、とりあえずついて来て。」

アルベルヒは軽く体を伸ばした後、フェイトについて行った。

その頃、市街地にレリックを持った少女が発見され、エリオたちが少女の手当てをしていた。

その後、少女は無事にヘリに乗せられ救出された。アルベルヒは少女を見た瞬間思わず、息があるか怪我がないか確かめた。子供大好きなアルベルヒである。アルベルヒは、ガジェットが海岸で出現したのでフェイトたちと一緒に迎撃に向かった。エリオたちはレリックを探しに、それぞれが任務に向かった。

「みんな、頼れるようになってきたね。」

「うん、でももっと頼れるようになってもらわないとね。」

「なのはは手厳しいな。」

「む、そんなことないよ。それじゃ行くよ。」

戦いが始まった

《ライジングムーヴ》

アルベルヒが動くときガジェットは瞬く間に海に落ちていった。

「まったく、歯ごたえがない。」

《ハア、こんなポンコツはやくぶっ壊してはやく帰ろっぜ??》

「違うない…む、なんだ??増援か??」

アルベルヒの目の前に100体以上のガジェットが向かってきていた。

「アルベルヒ!!こっちに来て!!」

フェイトに突然呼ばれたアルベルヒは急いで向かった。

「どうした!?!何かあったのか??」

アルベルヒがフェイトに話しかけると、ガジェットたちが一斉に攻撃を始めた。

「ちっ、レノ……。」

《ラウンドシールド》

「大丈夫だよ、アルベルヒさん。」

「なのはか、助かった。」

「うん、それよりもちょっと聞いて。」

なのはは球体のシールドを展開しながら言った。

「防衛ラインは大丈夫なんだけど、きりが無いから……。」

「多分コッチはオトリだと思うんだ。」

「ふむ、それで??」

「私が残るから、なのはとアルベルトはへりの方に行つて。」

「フェイトちゃん!?!」

「私たちじゃあ、時間が掛かりすぎる。限定解除すれば、広域殲滅でまとめて落とせる。」

「それは、そうだけど……」

「なんだか、やな予感がするんだ。」

「でも、フェイトちゃん……」

「割り込み失礼、ロングアーチからライトニングワンへ、限定解除申請も部隊長権限で却下します。」

「はやて…。」

「はやてちゃん??」

「やな予感私も同じでな……それで私が……」

「いや、それも却下だ。」

今まで黙っていたアルベルヒが口を開いた。

「…アルベルヒさん??」

「アルベルヒ、どっしりして……」

「フェイトとなのはは早くへりの方に行け。ここは俺がやる。」

「あんな、アルベルヒさんここは私の話を…」

《ライジンググムーヴ》

一瞬にして周りのガジェットを落とした。

「大丈夫だ、はやてはそこで座っている。あっちの方向のガジェットは長距離攻撃で落とすから。」

「長距離攻撃ってアルベルヒにそんなこと出来ないでしょ??」

自称アルベルヒのことならなんでも知っているフェイトは言った。

「いや、ある。レノン??？」

《はいはい、セカンドモード》

黒い剣は漆黒の弓に変わった。あまりに異様な雰囲気を出す弓にフ
イトは息をのんだ。

「…なんなの、その弓??？」

「何と言われても、弓だ。死神の弓……名をクミリヤ…数多の命を
奪った呪いの弓。」

「……その弓でどうする気や。アルベルヒさん??？」

正気に戻ったはやてが尋ねた。

「まあ、見ている。レノン???頼む。」

《フェイトちゃん、なのはちゃんは下がってくれ…危ないから》

M y r o a d i s f u l l o f d e a t h

我が行く道は死で満ちている

アルベルヒは静かにそう呟いた。アルベルヒの手にはいつの間にか黒い矢があり、弓を構えた。

「奪いとれ、クミリヤ。」

《クミリヤブレイカー》

微笑む死神

アルベルヒが矢から手を離すと、黒い矢は一瞬で見えなくなった。

「んな、アホな…半分近く反応ロストや。」

「じゃ、次だ……。」

アルベルヒはまた弓を構えた。戦いはまだ始まったばかりである。

24話(前書き)

スイマセン。下手くそなりに頑張っているんで、良かったら感想下さい。お願いします(=。。(ノ)

24話

アルベルヒのセカンドモードにより戦況はかなり有利になったが敵はいくら倒しても数が減らなかった。

「クソ、レノン！！数が減らない、どういうことだ！？」

《分かってる！！はやてちゃんか！？解析結果は！？》

「あつちは本物と幻術を使ってごまかしてるんや！！ちょっと待ってて、いま幻術パターン探ってるから…持ちこたえられるか！？アルベルヒさん！？」

アルベルヒはもともと魔力は平均かそれ以上だ。なのはやフェイトと比べると明らかに劣っている。なぜ、フェイトより速く動けたりセカンドモードによる広域型のできるかと言うと、それはアルベルヒのデバイスのおかげだった。セカンドモードはほぼレノンによる精密射撃。アルベルヒはただの拳銃の弾丸のようなものだった。最小限の魔力量で効率よく敵を倒す短期戦向けのセカンドモードだが、もはや長期戦になりつつあった。アルベルヒはそれを誰よりも深く理解していた。自分はレノンがなければなにも出来ない。自分には飛ぶ才能も魔力弾を作ることも出来ない。しかし自分が凡人であることを理解してもあきらめなかった。故にアルベルヒは足りないものはよそから補い、英雄とまで呼ばれるようになった。英雄と呼ば

れるようになるまでの過程、つまり経験がアルベルヒに最適の行動に導く。

「はやて！！解析が終わったらレノンに回せ！！レノン、もうファーストモードに戻せ！！魔力が保たない！！」

《さすが、アルベルヒだぜー！！ひゃっほう、久しぶりの多勢に無勢だ！！じゃアルベルヒ自慢の体力が尽きるまでがんばりますか！！》

「アルベルヒさん！？ヤツパリ無理や。わたしが行っ…」

「はやて！！オレは自分が何をできるか知っている。はやてが居なくなったら誰か俺たちの居場所を守る！？いいから、そこで見てる！！」

「……………分かった。ただしむちゃだけはやめてな。」

「…ああ。解析が終わったら頼む。」

《イヤー、相変わらず敵はいつぱい。そして、それに向かって単騎でしかも剣一本で立ち向かう英雄と……………普通に考えたらただのバカだよな（笑）。しかも可愛い女の子に見てるなんて格好つけてさ。

これで負けたらたんなるカスだな。》

「ふん。レノン??オレが負ける??それはないな。この身は誰かのためにと常に戦ってきた。それにこんな機械がいくらいたところで敵ではない。」

そう言つてアルベルヒは黒い弓を消して、なにもない目の前に手を伸ばした。すると、いつの間にか黒い剣がアルベルヒの手の中にあつた。

「……………さあ、始めようか。」

アルベルヒによる高速戦闘が始まる。

アルベルヒが戦闘している間、市街地で助けられた少女が乗っていたヘリコプターが狙われるなどあったがなのはとフェイトがうまく対処した。その後アルベルヒを援護するためになのはとフェイトはアルベルヒのところに向かった。なのはとフェイトが着くとそこには圧倒的な闘いがあった。それは闘いという自体が意味がなかった。ガジェットが狙つて撃つても当たらないし、数秒で数体を撃墜。一方的なワンサイドゲームで、なのはとフェイトは改めてアルベルヒの強さを知った。今日の戦闘は終わったようだ。

数日後

市街地で助けられた少女はヴィヴィオと言っらしい。ヴィヴィオは六課で預けられることになったらしく、ヴィヴィオはアルベルヒに懐いていた。と言うか、アルベルヒが積極的にヴィヴィオの面倒を見ていた。それはもう嬉しそうに。ヴィヴィオは保護責任者と言う形でなのはとフェイトが見ることになった。そしてママと呼ばれるようになった。そしてアルベルヒは……

「パパ、遊んで。」

《ライジングムーヴ》

「どうしたんだ！？ヴィヴィオ。」

「パパ、抱っこ。」

《ライジングムーヴ》

「よし、ほらおいで。」

「パパ、お腹すいた。」

《ライジンググムーヴ》

「よし、待ってる。」

とまあ、こんな感じである。子供つまり小さい子供の欲求には誰よりも速く応える。それがアルベルヒのモットーである。ある日、ヴィオが朝練が終わったのはとフェイトを迎えに行ったとき…

「ママ〜」

「ヴィオ！！」

「危ないよ。転ばないでね。」

「あ…」

転んだ。周りが静になった。誰もが泣いちゃうだろうと思った。

「あ、大変！！」

「大丈夫、地面柔らかいしキレイに転んだ。怪我はしてないよ。」

「それはそうだけど。」

「ヴィヴィオ、大丈夫??怪我してないよね??頑張ってる自分で…」

《ライジンググム―ヴ》

「大丈夫か!?ヴィヴィオ!?クソ、俺が目を離れたスキに…ほら、よしよし大丈夫だ。」

どこからかアルベルヒが突然現れ、そっこでヴィヴィオを助けた。

「うう、う。パパ〜」

「ほら、俺がいるから大丈夫だよ。」

「うん!~!」

「アルベルヒさん、甘やかしすぎだよ」

「アルベルヒ！！ヴィヴィオ大丈夫！？」

なのはとフェイトがヴィヴィオを抱っこしたアルベルヒに近づいた。なのはは不満、フェイトは心配のようである。

「次は自分で立とうね？？ヴィヴィオ。」

「なのは、お前ヴィヴィオに対して厳しいと思うが……貴様、いい加減にしろよ。ヴィヴィオはまだ幼くてそれはもう可愛い。ヴィヴィオを苛めたやつは許さない」

なんか、アルベルヒがキレた。みんなドン引きである。なのははアルベルヒに対してこれからのヴィヴィオの教育について語り、フェイトはそんな二人を見てオロオロ状態である。何とというか今日も平和だった。

25話（前書き）

主人公設定がやっと決まりました。でも、まだ最後とか決めてない？

誰か、アドバイスや感想はいつでもいいんでお願いします。。

駄文でスイマセン。

25話

とある施設

一人の男が広い通路をゆっくりとした足取りで歩いていった。なにやら、悩んでいるようである。

「まだ足りない…やつを倒すには。衛生からのSSランクの攻撃…いや、足りない。やつはまだ本気を出してないようだ。ククククク、いやホントに素晴らしい。プロジェクトFでもこんなに興奮をしなかった。あの男の強さはなんだ？魔法ランクはAだと報告は聞いているが…有り得ない。となると、デバイスかレアスキルかそれとも…」

ぶつぶつと歩きながら、思考していると1人の女性から通信が入った。

「ドクター、ナンバー13キリエが目を覚ましました。」

「そうか…急いで、戦闘訓練を始めてくれ。それとやつのデータを全て見せ、学習させる。」

「わかりました。」

そこで通信は切れた。男は笑いながら通路を歩く。ジェイルスカリエッティは容赦なく自分の欲望のための障害物を潰そうとしていた。たとえ殺してでも…

それから数日後、交換意見陳述会当日になった。なのはたち前線隊長やフォアード全員が出動。アルベルヒはまだ自分の魔力ランクの測定結果や自分の立ち位置など、微妙なため六課に残ることになった。もちろんヴィヴィオと遊ぶ気まんまんだったが。なのはたちがヴィヴィオを心配しながらもヘリコプターに乗り行った後、フェイトが話しかけてきた。

「アルベルヒ??? ちょっといいかな??」

「どうした?? そんな深刻そうな顔をして。おっと、ヴィヴィオこっちおいで。もう、寝る準備しないとな。」

ヴィヴィオはアルベルヒに無言で抱きついた。何やら、寂しいようである。

「全く。悪い、フェイト?? ヴィヴィオ寝かしてからでいいか??」

「うん、分かった。」

それから、ヴィヴィオを寝かせるためにフェイトの部屋に移動した。ヴィヴィオを寝かそうとすると通信が入った。リンディ・ハラウンからである。

「ハア〜イ、こんばんわ。ヴィヴィオもこんばんわ。ん〜、フェイトさんの部屋なのに見知らぬ男性がいるわね。ひよっとしてお邪魔だったかしら??」

「もう、そんなんじゃないよ。前に話したと思うけど彼はアルベルヒ。」

「あらあら、あなたが噂のフェイトさんの彼氏!?!ふむふむ、よく見るといい男じゃない。良かったわね。フェイトさん。ところで、結婚式はいつやるのかしら??」

「ふえ!?!結婚式なんて…まだまだ速いと言うかその…。」

フェイトは赤くなってもじもじしながら笑っていると、さすがのアルベルヒもフェイトと話していると人が誰か気になった。

「フェイト??この人はいつたい…。」

「はじめまして。私はフェイトさんの母親リンディ・ハラウンよ。アルベルヒさん??よろしくね。」

「あ…、母親でしたか。」

リンディは急に真面目な顔になった。

「あなたのことは一応知っているつもりよ。孤高の英雄さん??あなたがどんな人かは理解しているつもりよ。それらを全て承知の上で言うわ。娘やみんなをお願いします。みんなまだ危なっかしい所があるから…守ってあげて。」

急に初対面の相手にこんなことを言われるなんて思っていなかったアルベルヒは困惑するが、リンディのあまりに真剣な顔にアルベルヒも真剣に返答した。

「はい、大丈夫です。自分の存在意義は今はそのためだけなので。我がデバイスと約束にかけて守ります。」

アルベルヒはまるで騎士のようにお辞儀した。

「頼もしい限りね。これでひとまず安心ね。フェイトさん…ところで…」

その後、リンディと話し終えてヴィヴィオ寝かした後アルベルヒとフェイトは海辺に来ていた。

「それで話つてのは何だ??」

「うん。明日：もしかしたら激しい戦闘になるかもしれないって言う警告が出てるの。それは私たちがいま警備してる本局かもしれないし、六課かもしれない。どちらにしても、警備体制はばっちしだけど：でも、まだ心配があるんだ。」

「フェイト??俺はいままで一人で戦ってきた。そして、いま俺が守る物は：フェイトたちであり、お前たちの居場所である六課だ。俺はそれをやるだけだ。俺の強さは知ってるだろ??大丈夫。安心してくれ。俺はちゃんと守るから。」

そう言って、フェイトの頭に手を乗せた。

「もう、子供扱いしないで。分かった、うん。みんなはあたしとなのはたちが守る。アルベルヒはヴィヴィオと六課をお願い。」

「ああ。行っていい。」

フェイトは真面目な顔して行って来ると言っつて、浜辺を去った。アルベルヒはフェイトの背中を見つっつ、これから何が起きても…大丈夫だと自分に言い聞かせ決意した。

26話(前書き)

頑張って、書いたのでよろしく願いします!!

26話

とある施設

1人の女性がピアノのようなキーボードをまるでピアノを弾くようにしていた。

「全機配置完了。ドクター、始めますか??」

「ふふふ、アハハハハハ。」

「楽しそうですね。」

「ああ、楽しいさ。この手で世界の歴史を変えるのだからね。研究者として技術者として、心が騒ぐよ。そうだろ??ウーノ??我々のスポンサーたちにとくと見せてやろう。われらの思いと研究と開発の成果を…さあ!!始めよう!!…!!」

この言葉によって、闘いが始まった。アルベルヒにとって長い1日が始まる。

管理局本部が攻撃されている間、六課も管理局本部の状況を把握しなんとか情報をヴィータたち教えていた。しかし、自分たちがいる六課が攻撃されているとは思わなかった。

「そんな、高エネルギー反応三体高速で飛来！！」

「こっちに向かってます！！！！」

「待機部隊、迎撃用意。近隣部隊に応援要請！！総員最大警戒体勢！！！！」

それぞれが、迎撃用意している時アルベルヒはヴィヴィオを連れて走っていた。

「くそ、どうなっている！？」

「分からないが、とりあえず避難が先だ！！」

犬型のザフィーラが吠えた。ヴィヴィオが涙目でアルベルヒを見上げる。

「パパ、怖いよ。」

「大丈夫だよ。レノン！？どうだ！？何か分かったか！？」

「どうやら、敵が来てる。それも、大群だ…ヤバいぜ、アルベルヒ」

「そんなにか…数は??？」

「あのポンコツロボが五千体以上…そのうち三体が強い…はん！！上等じゃねえか！！敵は総力戦だ。しかも、フェイトちゃんたちがいない。戦えるのはアルベルヒと、その犬、そしてあの医者つてところか??ダハハハハハハ！！こりゃー無理だよ。ゲームオーバー。セーブポイントからやり直しだぜ??アルベルヒ??？」

「ふん、いつもの事じゃないか。オレとレノン、お前がいればなんとかなるだろ??？」

「かぁ〜コイツは。まあ、その通りだ！！その通りだとも！！さあ、逝こうぜ！！セットアップ！！」

アルベルヒはバリアジャケットを着てザフィーラにヴィヴィオを預けて言った。

「ヴィヴィオと六課を頼む。俺は…ヤツらを潰して来る。」

アルベルヒはレノンに始めて、頼られた気がした。アルベルヒによる戦闘が始まった。

30分後

アルベルヒは手当たり次第にガジェットを壊していた。しかし、ガジェットもアルベルヒに向かって攻撃し今まで当たったことがないアルベルヒが徐々ににダメージを負っていた。

「ライジングムーヴ」

「ハアハア、クソ!!」

「アイアスシールド」

アルベルヒがシールドを前方に向けたが後方からのガジェットの触手がアルベルヒを捕らえた。アルベルヒを捕らえたと同時に何体ものガジェットの攻撃がアルベルヒを襲った。

「ぐあ!?!くぐっ…レノン!!」

「ライジンググムーヴ」

なんとか、致命傷は避けたがどうやら腕が痛めたらしい。アルベルヒが、改めて剣を構えると1人の女性がアルベルヒの目の前に現れた。

「私は、ナンバー13キリエ。孤高の英雄、アナタを倒しに来ました。」

「…ふん、さっきまでそのロボたちだけ戦わせて自分は遠くから眺めていたやつが俺を倒す??はん!! やってみろ!!」

アルベルヒはキリエを挑発するとキリエはいきなり笑い出した。

「アハハハハ!! アナタは分かってない!! 先ほど私の姉たちがあの犬たちの所に行きました。いくらあなたでも、これだけの数で攻められたら全部は対処出来ない。つまり、アナタの敗北ですよ。」

「ふん。まだ六課には傷一つ付いてない。ザフィーラたちもそれに力はある。それにお前を倒して、援護すればいいだけのことだ。」

「無理ですよ。」

「ライジンググムーヴ」

アルベルヒは一瞬にしてキリエの前に現れて黒い剣を叩きつけたが、キリエも一本の白い大剣でアルベルヒの攻撃を受け止めていた。

「ほら、無理です。アナタの速さは私にとってもはや脅威ではない。私のISタイムコンフューションの前ではね。」

アルベルヒは一回、距離をとってからもう一度攻めた。

「ライジンググムーヴ」

ガキン！！

今度は横から攻撃した。しかし、また止められた。しかも、片手だけで。

「あなたの高速移動は管理局でも随一です。しかし、弱点もありません。高速移動のモーションに入ったら、一つの方に進めず。連続でも四回が限界。違いますか??」

周りのガジェットの攻撃を剣で弾き返しながらアルベルヒは自分の

戦闘スタイルを暴かれても冷静だった。

「確かに。それが、俺の得意とする高速移動ライジングムーヴの正体だ。だが…」

「ライジングムーヴ」

アルベルヒは周りにいるガジェットを一瞬にして倒した。

「俺はまだ、本気を出してない。だから、こっからは俺の本気だ。お前に見せてやるよ。」

キリエは確かにアルベルヒはまだ本気を出していないのは分かっていたが、高速移動による攻撃だろうと予測していたので自信は揺るがなかった。

「ええ、見せて下さい。あなたの本気を。まあ、たいしたことないと思いますが。」

「一つ教えてやる。なんで、俺が1人で何千の敵と戦えたと思う？ 体力は絶対持たないし、セカンドモードでやるとしてもそれなりにスキがないと出来ない。じゃ、どうやってやるんだ??」

キリエは確かにそう思った。ガジェットたちが数が多いとは言え、アルベルヒは徐々にダメージは受けている。セントヘルナではガジェットではなく人間相手に戦ってきたはずだ。だとすると…キリエが前を向いた時アルベルヒは黒い剣をどこかに消した。

「何のつもりですか??まさか、素手が本気だとしても言うのですか??」

アルベルヒは不気味に笑った。

「素手??そんなもんじぁない。俺のデバイスは使う人によってさまざまな形になる。それは、その人が一番使えるだろうと予想された武器だ。俺は才能がなくてな、いろんな武器を試したけど剣が好きだったから極めたんだ。だが、レノンによると俺はさまざまな武器に対して適正があるらしい。構えろよ、レノン!!」

「オールコンプリート。ファイルモード」

アルベルヒは何も手に持っていないし、特に変化はなかった。キリエはバカにされたと思い、アルベルヒに切りかかった。

ガキン

キリエは最初なにか起きているか分からなかった。ただ分かるのは自分の剣がアルベルヒが持つ斧、正確にはハルバートとも言えるも

のに受け止められたということだけだった。

「……それが、アナタの本気なのですか??」

キリエは距離をとって、構え直した。アルベルヒは無言で斧を消した。そして、キリエに向けて手をふるといきなり衝撃が来た。キリエは意味が分からないと体勢を整えてみるとアルベルヒの手の中はいつのまにか連結刃があった。

「ライジングムーヴ」

アルベルヒは姿を消したが、キリエには見えていたので防御しようと思ったが意味がなかった。剣を防御の姿勢にしようと瞬間、アルベルヒの持つ連結刃が槍に変わった。キリエは、何とか致命傷を避けられたがダメージは大きかった。

「何なんですか??アナタの武器……いったい何回変形したら気がすむのですか??」

「言っただろ??剣だけじゃない。俺は適正のある武器を一秒で変形させて多彩な攻撃を繰り出す。それが、俺の本気。間合いなんか関係ない。スピードについていけても意味がない。つまり、お前はチェックメイトだ。」

「ライジンググムーヴ」

アルベルヒの姿がまた消えた。キリエはもはや、戦意喪失していた。勝てるわけがない。スピードだけならまだしも、予測不能な高速移動からの攻撃。さすが、英雄とまで呼ばれた男だ。キリエは最後の悪あがきをしようとした時、異変が起きた。急に、ドクターの音が響いてキリエは己を失った。

ガキン

「何!？」

キリエに思いつき振りかぶったハンマーは素手で止められた。しかも、キリエの様子がおかしい。目が虚ろだ。すると、いきなり別の声でしゃべりだした。

「さすが、孤高の英雄。僕の予測を遥かに上回る結果だよ。」

「…お前、何者だ?？」

「僕かい???この子の生みの親だよ。まあ君たちにとっての敵の大將ってところかな。」

「それで、何のようだ?？」

「ささやかながら、挨拶と忠告をしたくてね。」

「なに??？」

「ククク、キミの大事な大事なあの子は先程回収したよ。まあ、キミが居なければさほど問題なかったよ。」

「ふん、嘘ついても無駄だ。六課に異常はない。それに、ここから見ても火すらない。」

「アハハハハハ、キミみたいのを憐れと言っただろうね。それじゃ……現実を見てもらうとしよう。」

キリエが指を鳴らすと、アルベルヒの見ていた六課が塵気楼のように揺れた。目に入ったのは、今にも、崩れそうな六課だった。火は全体を覆い尽くし、いたるところから煙が出ていた。

「そんな……。」

「バカな!??てめえなにしゃがった!??」

「いいね、いいよ。その顔。僕がみたいのはそれだよ！！理由は簡単、君は戦いに夢中でガジェットたちがいたるところに幻術トラップ仕掛けたのを気づかなかった。妨害ジャミングで、外部からの連絡を遮断。まあ、君はまんまと策にはまったのさ。」

アルベルヒの目がだんだんと暗くなっていった。その時、ハンマー型のレノンがほえた。

「アルベルヒ！！しっかりしろ！！まだ中の人達だけでも助けられる！！こんな所で、絶望してんじあねえ！！」

レノンの声でなんとか、助かった。早く助け出そうと移動しようとした時、キリエがアルベルヒにさらなる絶望を叩きつけた。

「急ぎの様子で、悪いが一つ忠告だよ。六課に衛星からSSSランクの攻撃がいまカウントダウンしている。」

「な！？」

「もし、直撃したら半径2キロがクレータになる。もちろん、近くにいたら死ぬ。余波も、予測だとかかなりのものになる。まあ、キミが出来るのは逃げるか六課と一緒に死ぬしかないよ。オススメはもちろん前者だけだね。」

「レノン!!! 本当か!?!」

「…アルベルヒ?? 多分、マジだ。いま六課通じていろいろ調べて、衛星が落下しながら六課に攻撃しようしてる。」

「クソオoooooooooooooooo!!!」

アルベルヒは吠えた。その怒りをキリエにぶつけた。キリエは海に沈んだが、今日の前の敵を倒しても意味がない。フェイトとの約束が…家族が…俺は何のために…

「…レノン?? あと、どれくらいだ??」

「…あと、3分とちょっとだ。なあ、アルベルヒ??」

「なんだ??」

「…お前の気持ちはよくわかる。だから、あえて言うぜ?? オレを使え。」

「??? どういう意味だ??」

「かぁ〜こいつは!!! だから、SSSランクの魔力をオレサマに吸

収させれば丸く収まるじゃねえか!？」

「バカな、無理だ。いくらレノンでもそんなことしたら壊れる!！」

「だから、いいんだって!!オレサマの名前の意味覚えてるか!？」

「……再生。」

「そうだ。レノバティオ、意味は再生だ。つまり、契約継続したままオレサマの人格とコレまでのお前に合わせた技が消える。それだけだ……なあ??軽いだろ」

「軽いつて、そんなわけないだろ!?!いつたい何年お前を頼りにしてきたと思う!?!ふざけるな!?!!!」

「……言っとくけどな、コレが最善だ。他の可能性は、お前が死ぬ確率が極めて高い。他に代案があるなら、言ってくれ。」

「……レノン??俺は……。」

「……悪い。」

「だからな！！お前はこんな所で死ぬんじあねえ！！いっぱいこれでもかって言うぐらい幸せになって死ぬ！！オレサマの願いはそれだけだ！！アルベルヒ！！」

「……………分からないけど、理解した。……………レノン？？いままで、その、なんだ、ありがとう。俺は、お前が、いなきや、何も始まら、なかった。」

アルベルヒはこみ上げる感情を押さえきれなかった。何でだろう、涙が止まらない。止まる訳がなかった。だって…自分と共に最も長く戦い抜いた友なのだから…

「……………アルベルヒ。はん！！さあ、やるぞ！！エヴァラルモード」

剣型に戻り、刀身が赤く染まった。アルベルヒは、六課の上空に向かった。涙は、どんな決意を決めた顔しても止まらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4798/>

魔法少女リリカルなのは～フェイトと英雄～

2010年10月10日03時16分発行